

新しい「日本語能力試験」 ガイドブック

2009年7月

独立行政法人国際交流基金 財団法人日本国際教育支援協会

はじめに

日本語能力試験は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する試験として、国際交流基金と日本国際教育協会（現日本国際教育支援協会）が1984年に開始しました。開始当初の受験者数は全世界で7,000人ほどでしたが、2008年の受験者数は全世界で約56万人にのぼり、世界最大規模の日本語の試験となっています。

近年、日本語能力試験の受験者は、大学で日本語を学ぶ学生に加えて、仕事で日本語を必要とする社会人、日本で生活するために日本語を必要とする人、学校教育の一環として日本語を学んでいる高校生や中学生など、多岐にわたっています。受験の目的も実力の測定に加え、就職、昇給・昇格のためと、変化が見られるようになりました。

試験開始から20年以上の間に、応用言語学、日本語教育学、テスト理論の発展があり、また、試験結果のデータも十分に蓄積されてきました。試験に関する要望や提言も出されました。

これらをふまえ、国際交流基金と日本国際教育支援協会は、2005年に「日本語能力試験 改善に関する検討会」を設置し、以来多くの専門家の協力を得て、この度、2010年に新しい「日本語能力試験」を実施することとなりました。

実施に先立ち、改定の内容をガイドブックとしてまとめました。本ガイドブックとは別に、『新しい「日本語能力試験」ガイドブック 概要版』と『新しい「日本語能力試験」問題例集』もありますので、そちらもあわせてご利用ください。

新しい「日本語能力試験」が、受験者をはじめ、関係者の皆様にとって、より一層役立つ試験となれば幸いです。

2009年7月

独立行政法人 国際交流基金

財団法人 日本国際教育支援協会

<目次>

I	試験の概要.....	5
1	新しい「日本語能力試験」	5
1. 1	対象と目的.....	5
1. 2	改定のポイント.....	5
1. 3	「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」とは.....	7
2	認定の目安.....	8
3	試験科目	10
4	試験の結果.....	11
4. 1	尺度得点.....	11
4. 2	試験結果の表示.....	11
4. 3	合否の判定.....	12
4. 4	試験結果の通知.....	13
4. 5	試験科目と得点区分の対応.....	15
5	得点等化.....	17
6	「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)	18
II	試験の内容.....	19
7	新試験の構成と大問のねらい.....	19
N 1	大問のねらい.....	21
N 2	大問のねらい.....	22
N 3	大問のねらい.....	23
N 4	大問のねらい.....	24
N 5	大問のねらい.....	25
8	新試験が測るもの.....	26
8. 1	課題遂行のための言語コミュニケーション能力.....	26
8. 2	言語知識(文字・語彙)	30
8. 3	言語知識(文法)	32
8. 4	読解.....	34
8. 5	聴解.....	37

9	問題解答上の留意点	42
9. 1	言語知識（文字・語彙）	42
9. 2	言語知識（文法）	44
9. 3	読解.....	47
9. 4	聴解.....	50
III	参考情報	60
10	申し込みと結果通知.....	60
10. 1	申し込み.....	60
10. 2	身体等に障がいがある方の受験	60
10. 3	試験結果の通知方法.....	60
11	よくある質問	61
11. 1	新試験について	61
11. 2	レベルについて	62
11. 3	試験問題について.....	62
11. 4	語彙や漢字、文法項目のリストについて.....	64
11. 5	申し込み、受験の手続きについて.....	65
11. 6	試験の結果について	66
11. 7	証明書等の発行について	67
11. 8	そのほか.....	68
12	新試験と現行試験の比較	69

I 試験の概要

1 新しい「日本語能力試験」

2010年より新しい「日本語能力試験」(以下、新試験)を実施します。

1.1 対象と目的

新試験は、現行の日本語能力試験(以下、現行試験)と同様に、原則として日本語を母語としない人を対象とします。日本語を学んだり使用したりしている幅広い層の人の日本語能力を測定し、認定することを目的としています。

1.2 改定のポイント

今回の改定のポイントは次の四つです。

(1) 課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測ります

新試験では、日本語に関する知識とともに実際に運用できる日本語能力を重視します。そのため、文字・語彙・文法といった言語知識と、その言語知識を利用してコミュニケーション上の課題を遂行する能力を測ります¹。

(2) レベルを4段階から5段階に増やします

新試験では、レベルを現行試験の4段階(1級、2級、3級、4級)から5段階(N1、N2、N3、N4、N5)に増やします。新試験と現行試験とのレベルの対応は、下の通りです。大きく変わる点は、現行試験の2級と3級の間にN3というレベルを新しく設けることです。

N1	現行試験の1級よりやや高めのレベルまで測れるようになります。合格ラインは現行試験とほぼ同じです。
N2	現行試験の2級とほぼ同じレベルです。
N3	現行試験の2級と3級の間のレベルです。 (新設)
N4	現行試験の3級とほぼ同じレベルです。
N5	現行試験の4級とほぼ同じレベルです。

「N」は「Nihongo(日本語)」、「New(新しい)」を表します。

¹ 詳しくは7ページ『1.3 「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」とは』、26ページ「8.1 課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を参照してください。

(3) 「得点等化」を行います

異なる時期に実施される試験では出題される問題が異なるので、どんなに慎重に作成しても、毎回の試験の難易度が多少変動してしまいます。そこで新試験では、「等化」という方法によって、異なる時期に実施された試験の得点を相互に比較可能な共通の尺度上で表します。その結果、同じレベルの試験であれば、いつの試験を受けても得点を比べることができます。「等化」は、世界の主な言語試験で広く採用されています。

(4) 「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称) を提供します

新試験では、各レベルの合格者が日本語を使用して実際にどのようなことができると考えているかを調査した「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)²を提供します。このリストには、合格者が日本語を使って実際にできそうだと考えていることの例が記述してあります。このような言語行動の例を手がかりに、合格者本人やまわりの人々が、試験の結果をより具体的に理解できるようになることを目指します。

² 詳しくは18ページ『6 「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)』を参照してください。

1. 3 「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」とは

わたしたちは生活の中でさまざまな「課題」に取り組んでいます。たとえば、「地図を見ながら目的の場所まで行く」とか「説明書を読みながら電気製品を使う」などです。課題には言語を必要とするものもあれば、そうでないものもあります。

言語を必要とする課題を遂行するためには、文字や発音、語彙に関する知識、語をつなげて文を作る文法の知識、文をどの順番でどのように言えばよいかを判断するための知識などの「言語知識」が必要です。また、目の前の課題に合わせて自分が持っている言語知識を実際に利用する力も必要です。

たとえば、「天気予報を聞いて、東京の明日の天気を知る」という課題について考えてみましょう。「東京の明日の天気を知る」には、「晴れ、くもり、雨」などの天気を表わす語や、「東京は明日は晴れでしょう」という文の構造、また、予報の説明の順番などの知識が必要です。さらに、予報で取り上げられるたくさんの場所の中から、東京の天気だけを聞き分けることも必要です。

このような「文字・語彙・文法といった言語知識と、その言語知識を利用してコミュニケーション上の課題を遂行する能力」を、新試験では「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」と呼びます。

新試験では、「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を下の「言語知識」「読解」「聴解」の三つに分けて測ります³。

言語知識	課題遂行に必要な、日本語の文字・語彙や文法に関する知識
読解	言語知識を利用しながら、文字テキストを理解して、課題を遂行する能力
聴解	言語知識を利用しながら、音声テキストを理解して、課題を遂行する能力

解答は現行試験と同様に、多枝選択⁴によるマークシート方式で行います。なお、話したり書いたりする能力を直接測る試験科目はありません。

³ 詳しくは19～25ページ「7 新試験の構成と大問のねらい」、42～59ページ「9 問題解答上の留意点」、『新しい「日本語能力試験」問題例集』を参照してください。

⁴ 本ガイドブックでは、用語として「選択肢」ではなく、「選択枝」を使います。

2 認定の目安

新試験にはN1、N2、N3、N4、N5の五つのレベルがあります。最もやさしいレベルがN5で、最も難しいレベルがN1です。

現行試験から大きく変わる点は、レベルが現行試験の4段階から5段階に増えることです。これまで、3級に合格した人から「なかなか2級に合格できない」という声が多くありました。このような状況に対応するため、現行試験の2級と3級の間にN3というレベルを新しく設けます。

新試験のレベル認定の目安は、表1のように「読む」「聞く」という言語行動で表します。この表には記述していませんが、それぞれの言語行動を実現するための言語知識も必要です。

N4とN5では、主に教室内で学ぶ基本的な日本語がどのぐらい理解できるかを測ります。N1とN2では、現実の生活の幅広い場面での日本語がどのぐらい理解できるかを測ります。そして、新しく設けるN3は、N1、N2とN4、N5の「橋渡し」のレベルです。それぞれのレベルで、具体的にどのような素材（テキスト）を「読む」、または「聞く」かについては表1を参照してください。

表 1 新しい「日本語能力試験」 認定の目安

レベル	<p style="text-align: center;">認定の目安</p> <p>各レベルの認定の目安を【読む】【聞く】という言語行動で表します。それぞれのレベルには、これらの言語行動を実現するための言語知識が必要です。</p>
N1	<p>幅広い場面で使われる日本語を理解することができる</p> <p>【読む】 ・幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる。</p> <p>・さまざまな話題の内容に深みのある読み物を読んで、話の流れや詳細な表現意図を理解することができる。</p> <p>【聞く】 ・幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。</p>
N2	<p>日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる</p> <p>【読む】 ・幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論など、論旨が明快な文章を読んで文章の内容を理解することができる。</p> <p>・一般的な話題に関する読み物を読んで、話の流れや表現意図を理解することができる。</p> <p>【聞く】 ・日常的な場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。</p>
N3	<p>日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる</p> <p>【読む】 ・日常的な話題について書かれた具体的な内容を表す文章を、読んで理解することができる。</p> <p>・新聞の見出しなどから情報の概要をつかむことができる。</p> <p>・日常的な場面で目に触れる範囲の難易度がやや高い文章は、言い換え表現が与えられれば、要旨を理解することができる。</p> <p>【聞く】 ・日常的な場面で、やや自然に近いスピードのまとまりのある会話を聞いて、話の具体的な内容を登場人物の関係などとあわせてほぼ理解できる。</p>
N4	<p>基本的な日本語を理解することができる</p> <p>【読む】 ・基本的な語彙や漢字で書かれた日常生活の中でも身近な話題の文章を、読んで理解することができる。</p> <p>【聞く】 ・日常的な場面で、ややゆっくりと話される会話であれば、内容がほぼ理解できる。</p>
N5	<p>基本的な日本語をある程度理解することができる</p> <p>【読む】 ・ひらがなやカタカナ、日常生活で用いられる基本的な漢字で書かれた定型的な語句や文、文章を読んで理解することができる。</p> <p>【聞く】 ・教室や、身の回りなど、日常生活の中でもよく出会う場面で、ゆっくり話される短い会話であれば、必要な情報を聞き取ることができる。</p>

3 試験科目

新試験の試験科目と試験時間は表2の通りです。

表2 試験科目と試験時間⁵

レベル	試験科目 (試験時間)		
N 1	言語知識 (文字・語彙・文法)・読解 (110分)		聴解 (60分)
N 2	言語知識 (文字・語彙・文法)・読解 (105分)		聴解 (50分)
N 3	言語知識 (文字・語彙) (30分)	言語知識 (文法)・読解 (70分)	聴解 (40分)
N 4	言語知識 (文字・語彙) (30分)	言語知識 (文法)・読解 (60分)	聴解 (35分)
N 5	言語知識 (文字・語彙) (25分)	言語知識 (文法)・読解 (50分)	聴解 (30分)

*試験時間は変更される場合があります。

N 1とN 2の試験科目は「言語知識 (文字・語彙・文法)・読解」と「聴解」の2科目です。N 3、N 4、N 5の試験科目は、「言語知識 (文字・語彙)」「言語知識 (文法)・読解」「聴解」の3科目です。

N 3、N 4、N 5では、出題される漢字、語彙、文法項目の数が少ないので、N 1、N 2と同じように「言語知識 (文字・語彙・文法)・読解」で試験をすると、いくつかの問題がほかの問題のヒントになることがあります。それを避けるために、「言語知識 (文字・語彙・文法)・読解」を「言語知識 (文字・語彙)」と「言語知識 (文法)・読解」に分けて、試験を実施します。

⁵ 聴解は、試験問題の録音の長さによって試験時間が多少変わります。

4 試験の結果

4.1 尺度得点

現行試験の得点は、正答数にもとづく「素点」で表示しています。それに対して、新試験の得点は「尺度得点」で表示します。

「尺度得点」とは、「等化⁶」を行って得られる得点です。以下、本ガイドブックでは新試験の「尺度得点」のことを、「得点」と呼びます。

4.2 試験結果の表示

新試験では、試験結果を表3の得点区分にしたがって表示します。N1、N2、N3の得点区分は「言語知識（文字・語彙・文法）」「読解」「聴解」の3区分です。N4、N5の得点区分は「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」と「聴解」の2区分です。

N4とN5で「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」を一つにまとめるのは、日本語学習の基礎段階にあるN4とN5では「言語知識」と「読解」の能力で重なる部分が多いので、「読解」だけの得点を出すよりも、「言語知識」と合わせて得点を出すことが学習段階の特徴に合っていると考えるためです。

表3 レベル別得点区分と得点の範囲

レベル	得点区分	得点の範囲
N1	言語知識（文字・語彙・文法）	0～60
	読解	0～60
	聴解	0～60
	総合得点	0～180
N2	言語知識（文字・語彙・文法）	0～60
	読解	0～60
	聴解	0～60
	総合得点	0～180
N3	言語知識（文字・語彙・文法）	0～60
	読解	0～60
	聴解	0～60
	総合得点	0～180
N4	言語知識（文字・語彙・文法）・読解	0～120
	聴解	0～60
	総合得点	0～180
N5	言語知識（文字・語彙・文法）・読解	0～120
	聴解	0～60
	総合得点	0～180

⁶ 詳しくは17ページ「5 得点等化」を参照してください。

各レベルの得点の範囲は、表3に示した通りです。N1、N2、N3では「言語知識（文字・語彙・文法）」「読解」「聴解」の得点範囲はそれぞれ0～60点で、三つを合計した総合得点の範囲は0～180点です。「言語知識（文字・語彙・文法）」「読解」「聴解」の総合得点に占める割合は、1：1：1です。

N4、N5では「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」の得点範囲は0～120点、「聴解」の得点範囲は0～60点で、二つを合計した総合得点の範囲は0～180点です。「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」と「聴解」の総合得点に占める割合は2：1となっています。なお、「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」の得点は、「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」とに分けることはできません。

また新試験では、全てのレベルにおいて、総合得点に占める「聴解」の割合が3分の1となり、現行試験の4分の1に比べて高くなります。

4.3 合否の判定

現行試験では総合得点で合否判定を行っています。それに対して、新試験では総合得点と、各得点区分の基準点の二つで合否判定を行います。基準点とは、各得点区分で少なくともこれ以上が必要という得点です。得点区分の得点が一つでも基準点に達していない場合は、総合得点がどんなに高くても不合格になります。新試験で各得点区分に基準点を設ける目的は、学習者の日本語能力を総合的に評価するためです。

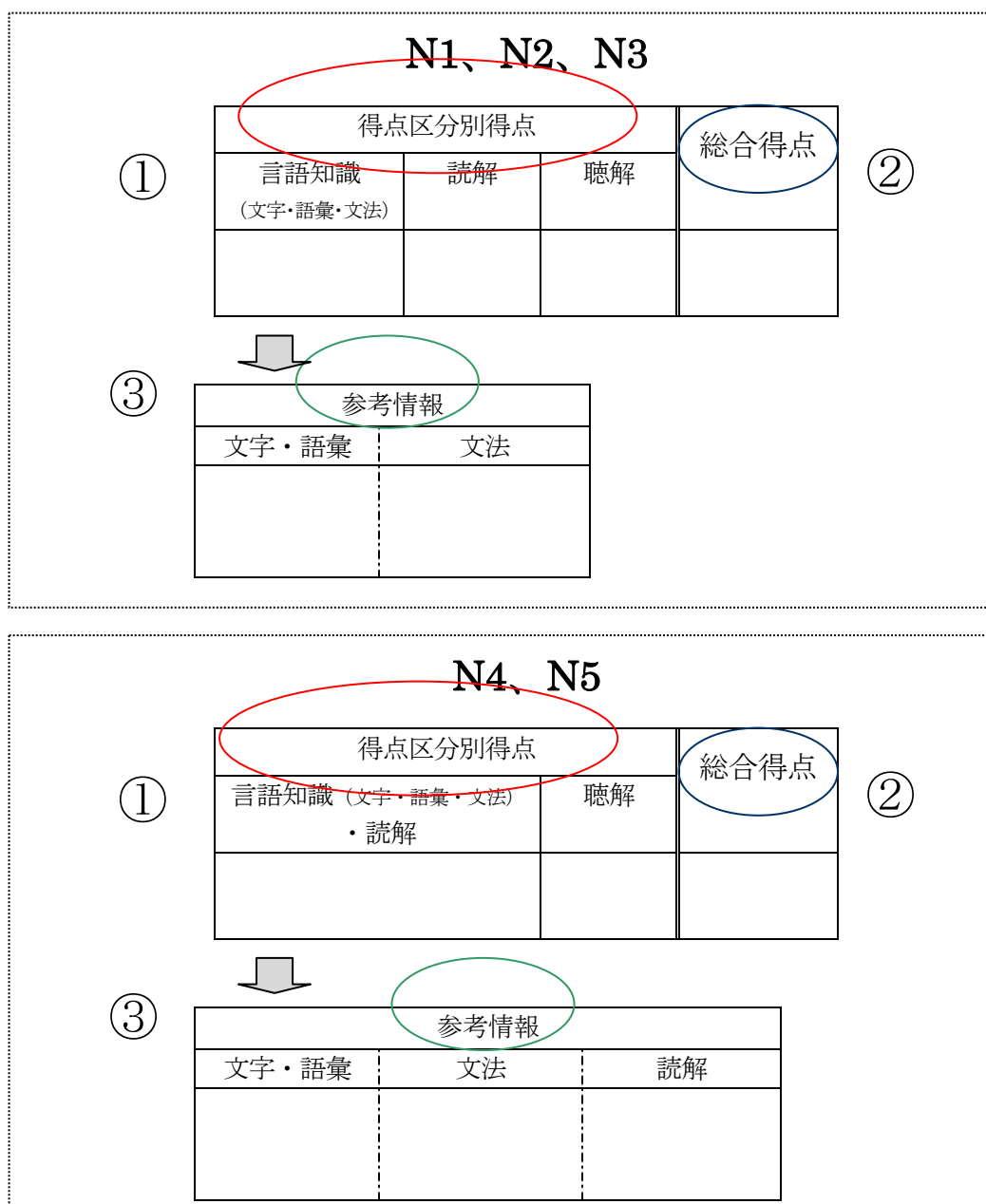
総合得点と各得点区分の基準点による合否判定の詳細は2010年に決定します。

4. 4 試験結果の通知

図1は新試験のN1、N2、N3受験者向けと、N4、N5受験者向けの「合否結果通知書」の一部を示したものです。①は得点区分別の得点（尺度得点）です。②は①を合計した総合得点です。③は今後の日本語学習のための参考情報です。正答率をもとにA、B、Cの三段階で表示します。Aは正答率が67%以上、Bは34%以上67%未満、Cは34%未満です。なお、この参考情報は、合否判定の対象ではありません。

図1 成績の例

（「合否結果通知書」より一部抜粋。実際の書式は変更される場合があります。）



N1、N2、N3の参考情報は、「言語知識（文字・語彙・文法）」の「文字・語彙」と「文法」に

ついて表示します。この参考情報によって「言語知識」の「文字・語彙」と「文法」が、それぞれどのぐらいできたかがわかります。

N4とN5の参考情報は、「言語知識（文字・語彙）・読解」の「文字・語彙」、「文法」、「読解」について表示します。この参考情報によって「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」の中の「文字・語彙」「文法」「読解」が、それぞれどのぐらいできたかがわかります。

なお、N1、N2、N3の「読解」と、全てのレベルの「聴解」では、単独で尺度得点が表示されますので、参考情報はありません。

たとえば、N3を受験したYさんの例では、「言語知識（文字・語彙・文法）」について、参考情報を見ると「文字・語彙」はA（正答率67%以上）で「よくできた」こと、「文法」はC（正答率34%未満）で「あまりできなかった」ことがわかります。

例 N3を受験した Yさんの成績情報

得点区分別得点			総合得点
言語知識 (文字・語彙・文法)	読解	聴解	
50/60	30/60	40/60	120/180



参考情報	
文字・語彙	文法
A	C

- A よくできた（正答率67%以上）
- B できた（正答率34%以上67%未満）
- C あまりできなかった（正答率34%未満）

4. 5 試験科目と得点区分の対応

新試験では、試験を受けるときの「試験科目」と、試験の結果を受け取るときの「得点区分」は、表4のように対応しています。

N1とN2では、試験科目「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」の得点は、「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」の二つの区分で表示されます。「聴解」は試験科目と得点区分が一致しています。

N3では、試験科目「言語知識（文字・語彙）」と「言語知識（文法）・読解」の得点は、「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」の二つの区分で表示されます。「聴解」は試験科目と得点区分が一致しています。

N4とN5では、試験科目「言語知識（文字・語彙）」と「言語知識（文法）・読解」の得点は、「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」の一つの区分で表示されます。「聴解」は試験科目と得点区分が一致しています。

このような対応になっているのは、各レベルの学習段階の特徴に合わせた試験を実施することで、より正確な日本語能力を測定することを重視するためです。

表 4 試験科目と得点区分の対応

レベル	試験科目	得点区分	得点の範囲
N 1 N 2	言語知識 (文字・語彙・文法)・読解	言語知識 (文字・語彙・文法)	0～60
		読解	0～60
N 3	聴解	聴解	0～60
		言語知識 (文字・語彙)	0～60
		言語知識 (文法)・読解	0～60
N 4 N 5	聴解	言語知識 (文字・語彙・文法)・読解	0～120
		言語知識 (文字・語彙)	0～60
		言語知識 (文法)・読解	0～60

N 1とN 2では、「言語知識 (文字・語彙・文法)」と「読解」を一つの試験科目として試験を実施しますが、N 3、N 4、N 5では、「言語知識 (文字・語彙)」と「言語知識 (文法)・読解」の二つの試験科目で実施します。

これは、N 3、N 4、N 5では、出題される語彙、漢字、文法項目の数が少ないので、「言語知識 (文字・語彙・文法)・読解」の一つの試験科目にするといくつかの問題がほかの問題のヒントになることがあるためです。

N 1、N 2、N 3では、「言語知識 (文字・語彙・文法)」と「読解」をそれぞれ独立した能力として測定し、得点区分を分けますが、N 4とN 5では、「言語知識 (文字・語彙・文法)」と「読解」を一つの得点区分にまとめます。

N 4とN 5で「言語知識 (文字・語彙・文法)」と「読解」を一つにまとめるのは、日本語学習の基礎段階にあるN 4とN 5では「言語知識」と「読解」の能力で重なる部分が多いので、「読解」だけの得点を出すよりも、「言語知識」と合わせて得点を出すことが学習段階の特徴に合っていると考えるためです。

5 得点等化

異なる時期に実施される試験では出題される問題が異なるので、どんなに慎重に作成しても、毎回の試験の難易度は多少変動してしまいます。

そこで新試験では、「等化」という方法によって、異なる時期に実施された試験の結果を共通の尺度上の得点で表わして相互に比較できるようにします。

等化には次のようなメリットがあります。

- ① 試験の得点が試験の難易度の影響を受けないので、合否判定の基準が一定し、公平さが保たれる。
- ② 異なる時期に実施された試験の得点が比較できるため、受験者が自分の日本語能力の伸びを確認したり、次の学習目標を設定したりすることができる。

たとえば、Zさんがある年の7月と12月にN2を受験したとして、得点区分の「聴解」の結果を表5に示します。この2回の試験は、7月より12月のほうが難しかったとします。Zさんがどちらの回でも全20問中10問に正答した場合、正答数だけを比べればZさんの能力には変化がないように見えます。一方、等化によって得られた尺度得点は、7月は30点、12月は35点で、難しかった12月の試験の得点が高く示されています。

このように、試験の結果を尺度得点で表示することによって、試験の難易度の影響を受けずに、受験者が自分の能力の伸びを確認できるようになります。

表5 ZさんのN2「聴解」試験の結果

	7月	12月
「聴解」の正答数	20問中10問	20問中10問
等化された「聴解」の尺度得点	30点	35点

* 表中の問題数および得点の数字は説明のために出した例で、実際の尺度得点表示によるものではありません。

6 「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)

試験の得点や合否判定だけでは、実際の生活で日本語を使って具体的に何ができるのかがわかりません。そこで、新試験では、試験の結果を解釈するための参考情報として「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)を提供します。

「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)は、各レベルの合格者が日本語でどのような言語行動ができると「考えているか」を調査して、その結果をレベルに対応する形にまとめたものです。現在作成中のリストから、言語行動の記述例の一部を紹介します。

「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)の記述例

聞く	学校や職場、公共の場所でのアナウンスを聞いて、大まかな内容が理解できる。
話す	アルバイトや仕事の面接などで、希望や経験を詳しく述べることができる。
読む	関心のある話題に関する新聞や雑誌の記事を読んで、内容が理解できる。
書く	感謝や謝罪、感情を伝える手紙やメールが書ける。

*上の記述例に対応するレベルは現在調査中のため示していません。

実際の「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)では、上のような「聞く・話す・読む・書く」の技能別に記述された言語行動が、新試験の各レベルとどう対応しているかを示します。合格者本人やまわりの人々がこのリストを参照することで、「このレベルの合格者は、学習・生活・仕事の場面で日本語を使って何ができそうか」を推測することができます。このように、試験結果の解釈のための参考情報として利用されることを意図しています。

ただし、「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)は合格者の自己評価を基にしたリストであるため、あるレベルの合格者全員が「〇〇できる」ことを保証するものではなく、そのレベルの合格者ができると考えていることを表すものです。

「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)は、2010年度中に提供します。

II 試験の内容

7 新試験の構成と大問のねらい

各試験科目で出題する問題を、測ろうとしている能力ごとにまとめたものを「大問」とよびます。新試験の大問は、表6「試験科目別大問の構成」に示す通りです。新試験がどのような日本語能力を測るかについては26ページからの「8 新試験が測るもの」を、各大問の具体的な説明については30～40ページを参照してください。

表6では、現行試験の問題形式と比較して、次のような印をつけます。

◆	現行試験では出題されていなかった新しい問題形式のもの
◇	現行試験の問題形式を引き継いでいるが、形式に部分的な変更があるもの
○	現行試験でも出題されていたもの
—	そのレベルで出題されないもの

表6 試験科目別大問の構成

試験科目		大問	N1	N2	N3	N4	N5
言語知識 ・ 読解	文字・語彙	漢字読み	◇	◇	◇	◇	◇
		表記	—	◇	◇	◇	◇
		語形成	—	◇	—	—	—
		文脈規定	○	○	○	○	◇
		言い換え類義	○	○	○	○	○
		用法	○	○	○	○	—
	文法	文の文法1 (文法形式の判断)	○	○	○	○	○
		文の文法2 (文の組み立て)	◆	◆	◆	◆	◆
		文章の文法	◆	◆	◆	◆	◆
	読解	内容理解(短文)	○	○	○	○	○
		内容理解(中文)	○	○	○	○	○
		内容理解(長文)	○	—	○	—	—
		統合理解	◆	◆	—	—	—
		主張理解(長文)	◇	◇	—	—	—
		情報検索	◆	◆	◆	◆	◆
聴解	課題理解	◇	◇	◇	◇	◇	
	ポイント理解	◇	◇	◇	◇	◇	
	概要理解	◇	◇	◇	—	—	
	発話表現	—	—	◆	◆	◆	
	即時応答	◆	◆	◆	◆	◆	
	統合理解	◇	◇	—	—	—	

現行試験では出題されていなかった新しい形式の問題（◆で表示）については、42～59ページの「9 問題解答上の留意点」に説明があります。

各レベルの「大問のねらい」は21～25ページの表に示す通りです。各大問には、複数の小問が含まれます⁷。表中の「小問数」は、毎回の試験で出題する小問数の目安で、実際の試験での出題数は多少異なる場合があります。

⁷ 読解では、一つのテキスト（本文）に対して、複数の「小問」がある場合もあります。

N 1 大問のねらい

試験科目 (試験時間)		問題の構成				
		大問	小問 数*	ねらい		
言語知識 ・ 読解 (110分)	文字・ 語彙	1	漢字読み	◇	6	漢字で書かれた語の読み方を問う
		2	文脈規定	○	7	文脈によって意味的に規定される語が何であることを問う
		3	言い換え類義	○	6	出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問う
		4	用法	○	6	出題語が文の中でどのように使われるのかを問う
	文法	5	文の文法1 (文法形式の判断)	○	10	文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるかを問う
		6	文の文法2 (文の組み立て)	◆	5	統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う
		7	文章の文法	◆	5	文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う
	読解*	8	内容理解(短文)	○	4	生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など200字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		9	内容理解(中文)	○	9	評論、解説、エッセイなど500字程度のテキストを読んで、因果関係や理由などが理解できるかを問う
		10	内容理解(長文)	○	4	解説、エッセイ、小説など1000字程度のテキストを読んで、概要や筆者の考えなどが理解できるかを問う
		11	統合理解	◆	3	複数のテキスト(合計600字程度)を読み比べて、比較・統合しながら理解できるかを問う
		12	主張理解(長文)	◇	4	社説、評論など抽象性・論理性のある1000字程度のテキストを読んで、全体として伝えようとしている主張や意見がつかめるかを問う
		13	情報検索	◆	2	広告、パンフレット、情報誌、ビジネス文書などの情報素材(700字程度)の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
聴解 (60分)	1	課題理解	◇	6	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適切か理解できるかを問う)	
	2	ポイント理解	◇	7	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う)	
	3	概要理解	◇	6	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できるかを問う)	
	4	即時応答	◆	14	質問などの短い発話を聞いて、適切な応答が選択できるかを問う	
	5	統合理解	◇	4	長めのテキストを聞いて、複数の情報を比較・統合しながら、内容が理解できるかを問う	

* 「小問数」は毎回の試験で出題される目安で、実際の試験での出題数は多少異なる場合があります。また、小問数は変更される場合があります。

* 「読解」では、一つのテキスト(本文)に対して、複数の問題がある場合もあります。

N2 大問のねらい

試験科目 (試験時間)	問題の構成					
	大問		小問 数*	ねらい		
言語知識 ・ 読解 (105分)	文字・ 語彙	1	漢字読み	◇	5	漢字で書かれた語の読み方を問う
		2	表記	◇	5	ひらがなで書かれた語が、漢字でどのように書かれるかを問う
		3	語形成	◇	5	派生語や複合語の知識を問う
		4	文脈規定	○	7	文脈によって意味的に規定される語が何であることを問う
		5	言い換え類義	○	5	出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問う
		6	用法	○	5	出題語が文の中でどのように使われるのかを問う
	文法	7	文の文法1 (文法形式の判断)	○	12	文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるかを問う
		8	文の文法2 (文の組み立て)	◆	5	統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う
		9	文章の文法	◆	5	文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う
	読解*	10	内容理解(短文)	○	5	生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など200字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		11	内容理解(中文)	○	9	比較的平易な内容の評論、解説、エッセイなど500字程度のテキストを読んで、因果関係や理由、概要や筆者の考えなどが理解できるかを問う
		12	統合理解	◆	2	比較的平易な内容の複数のテキスト(合計600字程度)を読み比べて、比較・統合しながら理解できるかを問う
		13	主張理解(長文)	◇	3	論理展開が比較的明快な評論など、900字程度のテキストを読んで、全体として伝えようとしている主張や意見がつかめるかを問う
		14	情報検索	◆	2	広告、パンフレット、情報誌、ビジネス文書などの情報素材(700字程度)の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
聴解 (50分)	1	課題理解	◇	5	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できるかを問う)	
	2	ポイント理解	◇	6	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う)	
	3	概要理解	◇	5	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できるかを問う)	
	4	即時応答	◆	12	質問などの短い発話を聞いて、適切な応答が選択できるかを問う	
	5	統合理解	◇	4	長めのテキストを聞いて、複数の情報を比較・統合しながら、内容が理解できるかを問う	

* 「小問数」は毎回の試験で出題される目安で、実際の試験での出題数は多少異なる場合があります。また、小問数は変更される場合があります。

* 「読解」では、一つのテキスト(本文)に対して、複数の問題がある場合もあります。

N3 大問のねらい

試験科目 (試験時間)		問題の構成				
		大問		小問 数*	ねらい	
言語知識 (30分)	文字・ 語彙	1	漢字読み	◇	8	漢字で書かれた語の読み方を問う
		2	表記	◇	6	ひらがなで書かれた語が、漢字でどのように書かれるかを問う
		3	文脈規定	○	11	文脈によって意味的に規定される語が何であるかを問う
		4	言い換え類義	○	5	出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問う
		5	用法	○	5	出題語が文の中でどのように使われるのかを問う
言語知識 ・ 読解 (70分)	文法	1	文の文法1 (文法形式の判断)	○	13	文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるかを問う
		2	文の文法2 (文の組み立て)	◆	5	統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う
		3	文章の文法	◆	5	文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う
	読解*	4	内容理解(短文)	○	4	生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など150～200字程度の書き下ろしのテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		5	内容理解(中文)	○	6	書き下ろした解説、エッセイなど350字程度のテキストを読んで、キーワードや因果関係などが理解できるかを問う
		6	内容理解(長文)	○	4	解説、エッセイ、手紙など550字程度のテキストを読んで、概要や論理の展開などが理解できるかを問う
		7	情報検索	◆	2	広告、パンフレットなどの書き下ろした情報素材(600字程度)の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
聴解 (40分)	1	課題理解	◇	6	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適切か理解できるかを問う)	
	2	ポイント理解	◇	6	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う)	
	3	概要理解	◇	3	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できるかを問う)	
	4	発話表現	◆	4	イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話を選択できるかを問う	
	5	即時応答	◆	9	質問などの短い発話を聞いて、適切な応答を選択できるかを問う	

* 「小問数」は毎回の試験で出題される目安で、実際の試験での出題数は多少異なる場合があります。また、小問数は変更される場合があります。

* 「読解」では、一つのテキスト(本文)に対して、複数の問題がある場合もあります。

N 4 大問のねらい

試験科目 (試験時間)		問題の構成				
		大問		小問 数*	ねらい	
言語知識 (30分)	文字・ 語彙	1	漢字読み	◇	9	漢字で書かれた語の読み方を問う
		2	表記	◇	6	ひらがなで書かれた語が、漢字でどのように書かれるかを問う
		3	文脈規定	○	10	文脈によって意味的に規定される語が何であるかを問う
		4	言い換え類義	○	5	出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問う
		5	用法	○	5	出題語が文の中でどのように使われるのかを問う
言語知識 ・ 読解 (60分)	文法	1	文の文法1 (文法形式の判断)	○	15	文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるかを問う
		2	文の文法2 (文の組み立て)	◆	5	統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う
		3	文章の文法	◆	5	文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う
	読解*	4	内容理解(短文)	○	4	学習・生活・仕事に関連した話題・場面の、やさしく書き下ろした100～200字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		5	内容理解(中文)	○	4	日常的な話題・場面を題材にやさしく書き下ろした450字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		6	情報検索	◆	2	案内やお知らせなど書き下ろした400字程度の情報素材の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
聴解 (35分)		1	課題理解	◇	8	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適切か理解できるかを問う)
		2	ポイント理解	◇	7	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う)
		3	発話表現	◆	5	イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話を選択できるかを問う
		4	即時応答	◆	8	質問などの短い発話を聞いて、適切な応答が選択できるかを問う

* 「小問数」は毎回の試験で出題される目安で、実際の試験での出題数は多少異なる場合があります。また、小問数は変更される場合があります。

* 「読解」では、一つのテキスト(本文)に対して、複数の問題がある場合もあります。

N 5 大問のねらい

試験科目 (試験時間)		問題の構成				
		大問		小問 数*	ねらい	
言語知識 (25分)	文字・ 語彙	1	漢字読み	◇	12	漢字で書かれた語の読み方を問う
		2	表記	◇	8	ひらがなで書かれた語が、漢字・カタカナでどのように書かれるかを問う
		3	文脈規定	◇	10	文脈によって意味的に規定される語が何であるかを問う
		4	言い換え類義	○	5	出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問う
言語知識 ・ 読解 (50分)	文法	1	文の文法1 (文法形式の判断)	○	16	文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるかを問う
		2	文の文法2 (文の組み立て)	◆	5	統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う
		3	文章の文法	◆	5	文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う
	読解*	4	内容理解(短文)	○	3	学習・生活・仕事に関連した話題・場面の、やさしく書き下ろした80字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		5	内容理解(中文)	○	2	日常的な話題・場面を題材にやさしく書き下ろした250字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
		6	情報検索	◆	1	案内やお知らせなど書き下ろした250字程度の情報素材の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
聴解 (30分)	1	課題理解	◇	7	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適切か理解できるかを問う)	
	2	ポイント理解	◇	6	まとまりのあるテキストを聞いて、内容が理解できるかどうかを問う(事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う)	
	3	発話表現	◆	5	イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話を選択できるかを問う	
	4	即時応答	◆	6	質問などの短い発話を聞いて、適切な応答を選択できるかを問う	

* 「小問数」は毎回の試験で出題される目安で、実際の試験での出題数は多少異なる場合があります。また、小問数は変更される場合があります。

* 「読解」では、一つのテキスト(本文)に対して、複数の問題がある場合もあります。

8 新試験が測るもの

8. 1 課題遂行のための言語コミュニケーション能力

日本語能力試験の改定は2005年に開始しました。以来、改定の基本方針である「課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測定する」にしたがって試験を設計し、試験としての妥当性、信頼性の検証を繰り返しながら、新試験の構築を行ってきました。本節では「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」について、課題とは何か、その遂行のために必要な言語コミュニケーション能力とは何か、について詳しく説明します。

(1) 課題

課題とは、何らかの目標や目的を達成するために、積極的に取り組むものを言います。課題には、手紙やEメールなどへの返事、ビジネスでの交渉、研究発表、物語を書いたりすることなど、言語を使って取り組む課題もあれば、絵を描いたり、修理や組み立てなど、言語を使わないで遂行する課題もあります。新試験では、学習者が現在日本語を使用している、または将来日本語を使用すると予想される状況を「目標言語使用領域（以下、本節内では「領域」）」として、設定しました。そして、この「領域」で遂行する頻度が高いと予想される「目標言語使用課題（以下、本節内では「課題」）」を選んで、出題します。

実際の試験問題においては、「課題」をそのまま出題する場合がありますし、「課題」の特徴を部分的に反映したり、加工したりして出題する場合があります。また、「課題」そのものでなく課題遂行に必要な言語知識を出題する場合がありますが、全体として「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を測定する試験を目指します。

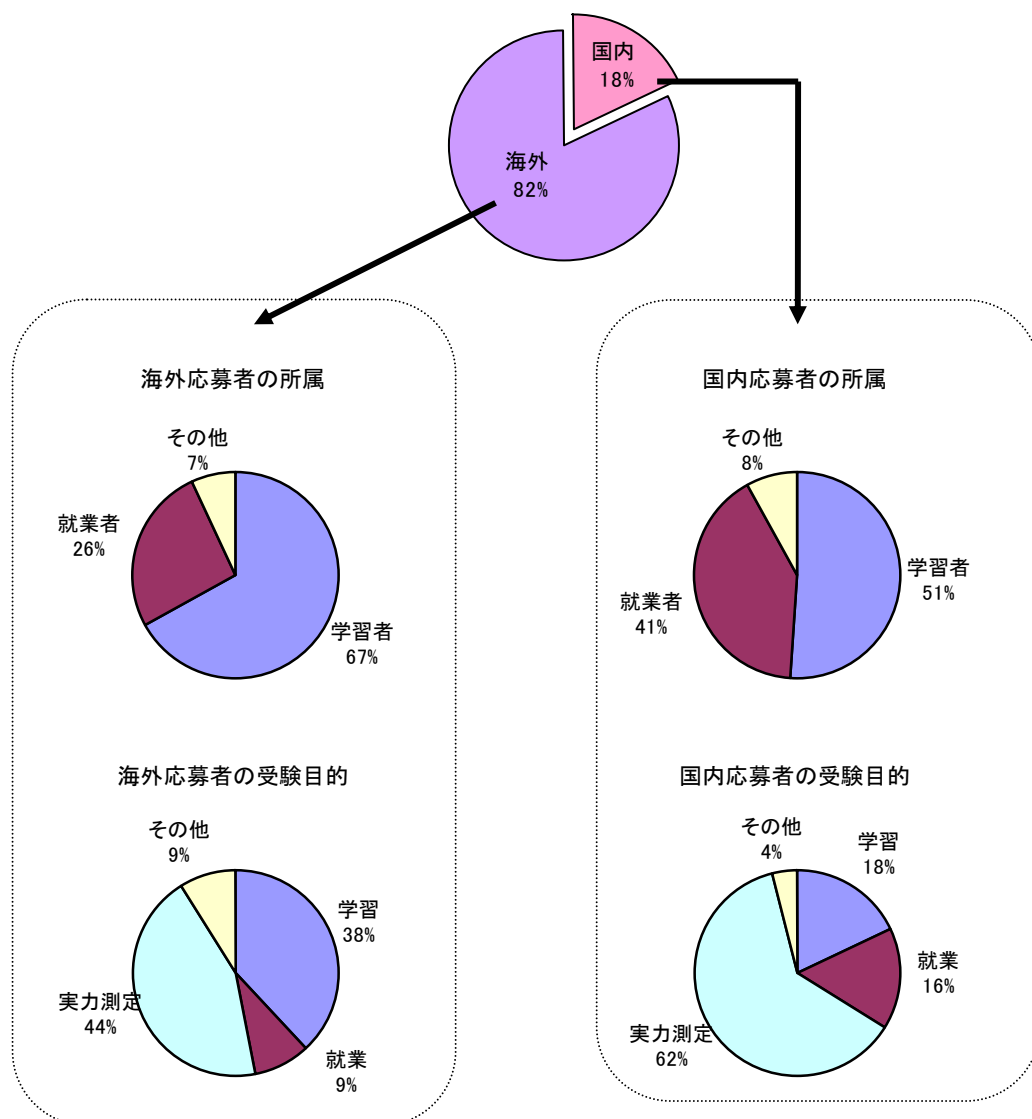
(2) 「領域」

日本語学習者の「課題」を把握するためには、本来なら学習者一人一人の言語行動を調査する必要がありますが、実際にはそれは不可能です。そこで、現行試験の応募者の現在の所属や、受験目的などに関するアンケート調査の結果から、「学習」「就業」「生活」の三つの「領域」の分類を手がかりとして用いながら、日本語学習者の現在や将来の「課題」を推測することにしました。

次のグラフ1は、2008年に受験願書を通じて応募者の日本語を使用する「領域」について調査を行った結果です。

グラフ 1

2008年日本語能力試験応募者数の割合



まず、応募者の所属をもとに、教育機関で学んでいる「学習者」と、働いている「就業者」に分けました。応募者がその所属先において必ずしも日本語を使用しているとは限らないため、直接「学習」「就業」という「領域」を示すものとは言えませんが、応募者の現在の所属から見ると、海外では「学習」が67%、「就業」が26%、国内では「学習」が51%、「就業」が41%となります。また、全応募者中18%を占める国内応募者は、日本での「生活」の場でも日本語を使用していることとなります。

次に、「受験目的」から、将来どのような「領域」で日本語を使用していく可能性があるかを見ると、海外では「学習」が38%、「就業」が9%、国内では「学習」が18%、「就業」が16%となります。

実際の試験問題を作成する際には「領域」や「課題」をさらにくわしく検討しますが、上記の調査で明らかになった日本語学習者の「領域」を前提にして、各「領域」の特徴を持つさまざまな「課題」を想定することにします。

なお、この調査で注目されるのが、「実力測定」を受験目的とする応募者が国内外を通じて最も多く、国内では62%、海外では44%を占めることです。このことから、やさしいレベルから難しいレベルまで、複数のレベルを持つ日本語能力試験には、「今どの学習段階にあるのか」「次にどんな目標をめざせばよいのか」といった学習段階や学習目標を示す役割が求められていると考えられます。

(3) 言語コミュニケーション能力と新試験の構成

新試験では「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を、「日本語学習者が、それぞれの目標言語使用領域で日本語を使用して課題を遂行するための日本語能力」と定義します。さらにこの能力は言語知識と、それを利用して「課題」を遂行する能力の二つからなります。したがって、言語知識も「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」の重要な構成要素と位置づけています。そして、この「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を測るために、N1～N5の5段階のレベルを通じて、言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解の三つに分けて測ることにしました。

表7 言語知識

構造的知識
— 文法的知識
語彙の知識
統語の知識
音韻／書記体系の知識
— テキストについての知識
結束性の知識
語用論的知識
— 機能的知識
— 社会言語学的知識

Bachman & Palmer (1996)を参考に作成

言語知識（文字・語彙・文法）においては、表7に示した Bachman & Palmer(1996)における言語知識の枠組みなどの先行研究を参考にしながら、語彙の知識、統語の知識（語と語を結びつけて文を作るための知識）、音韻／書記体系の知識（日本語の発音のしかたや書き表し方についての知識）、結束性の知識（文と文とを結びつけてまとまりを持った文章にするための知識）を測ります。なお結束性の知識は32ページ「8. 3 言語知識（文法）」で扱うテキスト性の知識に関連するものです。

一方、言語知識を利用して課題を遂行する能力は、読解や聴解でより一層現実に近い形で発揮されます。「課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測定する」試験として、その点を重視して試験の設計に反映すべきと考えました。そこで、N1、N2、N3レベルでは基礎段階のN4、N5に

比べて、問題構成において、読解の比率を高くしています。「聴解」に関しても、現行試験で総合点の4分の1だった得点の配分を、新試験では総合点の3分の1の重みにしています。

また、「課題」遂行の観点から新形式の問題を開発しました。そして現行試験からそのまま継承した問題形式、部分的に変更を加えた問題形式と合わせ、試験問題全体を「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を測るものとして再構成しました。

さらに、言語知識として出題される語彙および文法項目リストについては、現行試験のリスト作成から20余年を経過しているため、改めて現在の日本語学習者の「領域」を考慮して調査した言語データに基づき、内容を改定しました。

以下、言語知識（文字・語彙）、言語知識（文法）、読解、聴解の順に、新試験で測定する知識、能力について説明します。

8. 2 言語知識（文字・語彙）

（1）文字・語彙の知識とは

新試験の「言語知識（文字・語彙）」は、28ページの表7「言語知識」の中の「語彙の知識」と「音韻／書記体系の知識」に相当する知識を測定の対象にします。

文字・語彙の知識は二つの観点から捉えることができます。一つは「どのぐらいの数の語を知っているか」、もう一つは「ある語についてどのぐらい詳しく知っているか」です。「ある語についてどのぐらい詳しく知っているか」は、語の形式・意味・用法の3要素から成り立っています。現行試験の「文字・語彙」では、「認定基準」に示されている語数を知っていることを前提に、これらの3要素を測定するように問題が構成されています。新試験でも、現行試験の問題形式をふまえ、これらの3要素を測定することとしました。

（2）大問のねらい

「言語知識（文字・語彙）」の大問の構成は、表8の通りです。

表8 言語知識（文字・語彙） 大問の構成

試験科目	大問	N 1	N 2	N 3	N 4	N 5
言語知識 (文字・語彙)	漢字読み	◇	◇	◇	◇	◇
	表記	—	◇	◇	◇	◇
	語形成	—	◇	—	—	—
	文脈規定	○	○	○	○	◇
	言い換え類義	○	○	○	○	○
	用法	○	○	○	○	—

新試験の「言語知識（文字・語彙）」では、「漢字読み」「表記」「語形成」「文脈規定」「言い換え類義」「用法」の六つの大問を設定し、「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」の土台となる言語知識を、語の形式・意味・用法の三つの側面から測ります。

①語の形式に関する知識を測る問題

語の形式に関する知識を測る問題として、「漢字読み」「表記」「語形成」の三つの大問を設けました。「漢字読み」では漢字で書かれた語の読み方を、「表記」ではひらがなで書かれた語の漢字表記・カタカナ表記を問います。ただし、カタカナ表記を問うのはN5のみです。また、N1では「表記」の大問は出題しません。「語形成」は、派生語や複合語の知識を問います。「語形成」という大問はN2のみに設定されていますが、N1とN3でも他の大問（「文脈規定」）の中で同様の知識を問うことがあります。

②語の意味に関する知識を測る問題

語の意味に関する知識を測る問題として、「文脈規定」と「言い換え類義」の二つの大問を設けました。「文脈規定」では、一文中の空所に入る意味的に最も適当な語を問います。空所の前後の文脈からどのような意味を持つ語が空所に入るかを考え、その意味を表す語を選びます。「言い換え類義」では、出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問います。語の意味に関する知識を測定する「文脈規定」と「言い換え類義」は、N1からN5の全てのレベルで出題します。

③語の用法に関する知識を測る問題

語の用法に関する知識を測る問題として、「用法」という大問を設けました。「用法」では、語が文の中でどのように使われるのかを問います。具体的には、その語の品詞は何か、その語はどのような語と共に使うことができるかという点から、語の用法に関する知識を測定します。こうした知識は日本語学習がある程度進んだ段階で徐々に形成されると考えられるため、N5では出題せず、N1からN4で出題します。

8. 3 言語知識（文法）

（1）文法の知識とは

新試験の「言語知識（文法）」では、文法の知識を、文法形式とその意味用法に関する知識と、テキスト性⁸に関する知識という二つの観点から捉えます。

語だけを知っていても、文は作れません。文を作るためには、助詞を使ったり、動詞や形容詞などの活用語の形を変えたりして、語と語とが自然に結び付くようにしなければなりません。そのためには、助詞や活用語などといった、文法形式とその意味用法に関する知識が必要です。その知識がなければ、日本語の文として意味をなさない単なる語の羅列になってしまい、特に書かれた文の場合はまったく意味が通じないといったことも起こり得ます。

また、文を並べただけでは、まとまりを持った文章とは言えません。まとまりを持った文章を作るためには、接続詞を使ったり、視点を統一したりして、文と文とが自然につながるようにしなければなりません。そのためには、文章にまとまりを与えるテキスト性に関する知識が必要です。その知識がなければ、日本語の文章としてまとまりを持たない単なる文の連続になってしまい、伝えたいことが十分には伝わらないといったことも起こり得ます。

そこで、新試験では、文法の知識を、一文レベルと、一文を超えたレベルとの二つの観点から捉えて、測定することとしました。

（2）大問のねらい

「言語知識（文法）」の大問の構成は、表9の通りです。

表9 言語知識（文法） 大問の構成

試験科目	大問	N 1	N 2	N 3	N 4	N 5
言語知識 （文法）	文の文法1 （文法形式の判断）	○	○	○	○	○
	文の文法2 （文の組み立て）	◆	◆	◆	◆	◆
	文章の文法	◆	◆	◆	◆	◆

①文法形式とその意味用法に関する知識を測る問題

文法形式とその意味用法とに関する知識は、語と語とを結び付けて意味の通る文にするためにはどうすればいいのかを問うことで、測ることができると考えました。そこで、受験者がどのぐらい多くの文法形式を意味用法と合わせて知っているかを測るために、「文の内容に合った文法形式かどうかを

⁸ この「テキスト性」という概念は池上（1983）に従っています。

判断することができるかを問う」ことをねらいとした大問を設定し、問題形式として、一文レベルの空所補充形式をとりました。この大問を「文の文法1（文法形式の判断）」と呼びます。

また、語と語とを結び付けて意味の通る文にするためには、文法形式を知っているだけでなく、さらに、それを使って文が作れることが重要です。そこで、「統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う」ことをねらいとした大問を設定し、問題形式として、一文レベルの並べ替え形式をとりました。この大問を「文の文法2（文の組み立て）」と呼びます。

②テキスト性に関する知識を測る問題

テキスト性に関する知識は、文と文を結び付けてまとまりを持った文章にするためにはどうすればいいのかを問うことで、測ることができると考えました。そこで、「文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う」ことをねらいとした大問を設定し、問題形式として、一文を超えたレベルの空所補充形式をとりました。この大問を「文章の文法」と呼びます。

8. 4 読解

(1) 読解とは

読解とは、目の前のテキスト（文章）を読む目的や課題に合わせて、言語知識や話題に関する知識と、それらを利用する能力を一緒に使用して、テキストに書かれている情報を処理し、理解していく過程です。

読解の過程には、テキスト中の語から文、文から文章へと、小さな単位からより大きな単位へ段階的に進めていく読み方（ボトムアップ読み）と、言語知識や話題・場面に関する背景知識を活用して、テキスト全体の内容を予想し、次に来る細かい内容を予測しながら読み進めていく読み方（トップダウン読み）の、二つの方向の読み方があります。そして、この二つの読み方が同時に行われ、お互いに補い合ってさらに理解を深める読み方（相互作用読み）も行われます。

ただし、実際の生活で行われている読解はもう少し複雑で、私達はいろいろな読み方をしています。たとえば、同じ日本語で書かれたテキストでも、難しいテーマを扱った評論を読んで理解するのと、商品のパンフレットを見て機能や値段を見比べるのとでは、読み方が異なります。評論では論の流れを追いながら細かく正確に理解していくことが必要で、パンフレットでは探している情報を全体から素早く見つけ出すことが必要です。この二つの例では、それぞれの目的や課題に合わせて異なった読み方をしています。このように読解では、目的や課題に合わせて言語知識や話題に関する知識を利用するだけでなく、読み方を選ぶ能力も大切です。

読解の目標は、テキストから何らかの情報を得ることと言えます。新試験の「読解」では、「どのようなテキストから」「どのように情報を得るか」の二つの観点から課題を設定します。

まず「どのようなテキストから」については、テキストによって読み方が変わるので、26～28ページに示した「領域」に関する調査結果などを参考に、海外や国内の学習環境を考慮した適切な範囲で、多様なテキストを扱います。テキストの話題・内容は、学習に関するもの、生活の中で目に触れる実用的なもの、仕事に関するものなどを取り入れます。また、テキストの種類は、説明文、意見文、評論、エッセイなどの他に、生活場面で目にする連絡や案内、仕事で使われる文書などです。テキストの形式は、一般的な文章形式の他に、箇条書きや表の場合もあります。そして、テキストの長さも、レベルに応じて短文、中文、長文の区分けを行います⁹。

次に「どのように情報を得るか」ですが、読み方には次の表10のA～Dの四つのタイプがあります。新試験ではこの枠組みをもとに課題を設定しますが、実際の問題にはA～Dのどれか一つの読み

⁹ 各レベルの短文、中文、長文の長さについては、21～25ページの「大問のねらい」を参照してください。

方を主に求めるものと、二つを組み合わせた読み方を求めるものがあります。

表 1 0 四つの読み方

	テキストの全体	テキストの部分
迅速に	A. 全体を迅速に読む	B. 部分を迅速に読む
注意深く	C. 全体を注意深く読む	D. 部分を注意深く読む

Urquhart & Weir (1998) を参考に作成

(2) 大問のねらい

「読解」の大問の構成は、表 1 1 の通りです。

表 1 1 読解 大問の構成

試験科目	大問	N 1	N 2	N 3	N 4	N 5
読解	内容理解 (短文)	○	○	○	○	○
	内容理解 (中文)	○	○	○	○	○
	内容理解 (長文)	○	—	○	—	—
	統合理解	◆	◆	—	—	—
	主張理解 (長文)	◇	◇	—	—	—
	情報検索	◆	◆	◆	◆	◆

新試験で出題される大問を以下の四つに分類して説明します。

①テキストの内容 (部分) を的確に理解する問題

新試験でも現行試験と同様に、言語知識を利用してテキストの細かい部分を注意深く読んで的確に理解できるかどうかを重視します。これは、「部分を注意深く読む」読み方 (表 1 0 の D) を求めるもので、「内容理解」という大問として全レベル (N 1 から N 5) で出題します。テキストに書かれている事実関係が理解できているか、理由や原因が把握できているか、その文脈ではどのような意味なのかを理解できているかなどを問います。

②テキストの内容 (より広い部分・全体) を的確に理解する問題

外国語 (第二言語) の読解では、テキストの内容の細かい部分は理解できても、全体として何が書かれているのかがわからないということがしばしば起こります。テキストの全体像を的確に把握し、大意を取ったり、キーワードを押さえたり、どのような論理で展開しているかをとらえたりすることも、読解の大切な能力です。このような「全体を迅速に／注意深く読む」読み方 (表 1 0 の A と C)

を求める問題も、N1、N2、N3の「内容理解」で出題します。

また、論説文などのテキストでは、それが何を伝えるためのものなのか、そもそも筆者は何を言いたかったのかを理解することが全体の内容理解には欠かせません。そこで、N1とN2では「主張理解」という大問を立てて、テキストが全体として伝えようとしている主張・意見を読み取ることができるかを問います。

③関連がある複数のテキストを比較したり統合したりする問題

一つのテキストを読み進めながら、内容的に関連がある他のテキストと関係づけ、共通点や相違点を比較したり、複数のテキストの内容を統合して理解したりすることも、読解の能力の一つです。このような「全体を迅速に読む／部分を注意深く読む」読み方（表10のAとD）を求める問題を、N1とN2で「統合理解」という新しい大問を立てて出題します。たとえば同じ話題について違う立場から書かれた二つのテキストについて、その違いや同じところが理解できるかを問います。

④お知らせ、パンフレットなどから必要な情報を検索する問題

全体の内容を正確に理解することよりも、テキストの中から目的や課題に合わせて必要な情報を探し出すことに重点を置いた「情報検索」という大問を新しく立てます。これは「全体を／部分を迅速に読む」読み方（表10のAとB）を求める問題で、全てのレベルで出題します。この能力は、どのレベルでも必要な読解能力と考えるからです。たとえばアルバイトの募集広告を見て、全体をざっと見て条件などの必要な情報を探し出したり、自分の都合などに関係がある部分を突き止めて、自分の条件と比べたりできるかを問います。

8. 5 聴解

(1) 聴解とは

聴解とは、聞き手が話し手の発話を聞き、課題や目的に応じて、言語知識や話題に関する知識とそれらを利用する能力を合わせて使用しながら、情報を処理し、理解していく過程です。

聴解は、読解と同様、言語を理解する過程なので、両者には類似点が多いと言われています。一方、聴解は文字ではなく音声によって言葉が伝えられるため、聴解の過程には読解と異なるいくつかの特徴があります。

まず、聞き手は、聞こえてくる一連の音声テキストから自分で音声や意味のまとまりを認識する必要があります。例えば、「このお菓子、どうぞ。」という発話は、日本語を学習したことのない人の耳には“konookashidoozo”という意味のない音声の流れとしか聞こえないはずですが、日本語話者はここから／コノ／という一つの音声のまとまりや、「この」という意味を認識していると考えられます。

また、音声テキストには、文字で書かれたテキストとは異なる下のような特徴があり、聞き手はこれらの特徴を理解して聞く必要があります。

- ・ 音の変化が起こる（例：「～ている」→「～てる」、「～てしまう」→「～ちゃう」などの縮約、「あまり」→「あんまり」などの音の添加）
- ・ 音の強調やイントネーションが重要な意味を持つ
- ・ くり返しや言いよどみが生じる
- ・ 単語や句の形で話されたり、倒置が起こったりする
- ・ 話者間で共有されている情報は省略され、言語化されないことがある

さらに、聴解ではその場でその瞬間に聞いた言葉をすぐに理解しなければならないということも、読解との違いです。聞き手は、録音をしない限り、読み手がテキストを読み返したりゆっくり読んだりするように、自由に音声聞き直したり速度を落として聞いたりすることはできません。したがって、聞き手には音声で提示された情報を即時に処理して理解することが求められます。

以上をふまえた上で、新試験の「聴解」では現実のコミュニケーションに必要な聴解能力を問うことに重きをおき、試験問題をより現実の課題に近づけたものにします。聞き手は、一方的に情報を受け取るだけの受身的な存在ではありません。発話の中から自分が知りたいと思う情報を選びとったり、聞いた情報をもとに行動したりします。具体的な行動をとらない場合でも、聞き手は目的やテキストのタイプに応じて様々な聞き方をしていると考えられます。新試験では、このような、実際のコミュニケーション場面における聞き方のいくつかに焦点を当てて、聴解能力を測定します。

聴解の問題を現実のコミュニケーションに近づけるためには、聞き手がどのような役割で談話に参加し、どのようにテキストを聞いているかも考慮する必要があります。聞き手の役割は、状況によっ

て様々に異なります。例えば、ラジオやアナウンスを聞く状況では、聞き手は話し手の発話の内容を理解するだけですが、対面で会話している状況では、聞き手にもあいづち、応答、話す順番の交替などが求められます。新試験では、現実場面で求められる聞き手の役割をできる限り問題に反映させたいと考えています。そのため、発話の内容を理解するだけでなく、応答が求められる聞き手の役割を設定した問題を作成しています。もちろん、聴解の試験で、受験者の発話を測定することはできませんので、相手の発話に対する応答の適切さの理解を問うという形で出題します。

(2) 大問のねらい

「聴解」の大問の構成は、表 1 2 の通りです。

表 1 2 聴解 大問の構成

試験科目	大問	N 1	N 2	N 3	N 4	N 5
聴解	課題理解	◇	◇	◇	◇	◇
	ポイント理解	◇	◇	◇	◇	◇
	概要理解	◇	◇	◇	—	—
	発話表現	—	—	◆	◆	◆
	即時応答	◆	◆	◆	◆	◆
	統合理解	◇	◇	—	—	—

新試験の「聴解」の大問は、①内容が理解できるかどうかを問う問題と、②即時的な処理ができるかどうかを問う問題の二つに大きく分けられます。

①内容が理解できるかどうかを問う問題

内容理解を問う大問には、「課題理解」「ポイント理解」「概要理解」「統合理解」の四つがあります。「課題理解」と「ポイント理解」は、すべてのレベルで出題されます。「概要理解」はN 1、N 2、N 3で、「統合理解」はN 1、N 2で出題します。

「課題理解」は、ある場面で、具体的な課題の解決に必要な情報を聞き取り、適切な行動が選択できるかどうかを問う問題です。指示や助言をしている会話を聞き、それを受けた次の行動としてふさわしいものを選びます。選択枝は文字かイラストで提示されますが、イラストはできる限り現実の場面で目にするような形で示されており、現実のコミュニケーション場面に近づけた形となっています。課題を明確にするために、問題のテキストを聞く前に状況説明と質問が音声で示されます。

「ポイント理解」は、内容のポイントを絞って聞くことができるかどうかを問う問題です。現実のコミュニケーションでは、聞き手は、話し手の発話から、聞き手自身が知りたいと思うことや興味のあることを聞き取ろうとします。新試験においても、受験者があらかじめ何を聞き取らなければなら

いかを意識して聞くことができるように、問題のテキストを聞く前に状況説明と質問を音声で示し、また、問題冊子に印刷されている選択枝を読む時間を設けました。N1、N2、N3のレベルでは、話し手の心情や出来事の原因などが理解できるかどうか、N4、N5レベルでは、日程・場所などの具体的な情報が理解できるかどうかを主に問います。

「概要理解」は、テキスト全体から話者の意図や主張などを理解できるかどうかを問う問題です。一部の語や発話が理解できるだけでなく、発話全体としてのメッセージが何かを理解することは、現実場面でも求められる聞き方です。このような問題は、発話の一部の理解を問う問題に比べて、より高度な能力を要求すると考えられるため、N1、N2、N3で出題します。全体を理解する聞き方を問う問題なので、質問と選択枝は事前に示されません。

「統合理解」は、内容がより複雑で情報量の多いテキストについて、内容の理解を問う問題です。例えば、発話者が3名の会話や、2種類の音声テキスト（例：あるニュースと、それについて話し合っている会話の両方を聞く問題）などが含まれます。これらのテキストを理解するには、複数の情報を統合する（比較したり関連づけたりする）必要があり、高度な能力を要求するため、N1とN2で出題します。

②即時的な処理ができるかどうかを問う問題

現実の場面においては、一方的に聞くだけでなく、自分も会話に参加しながら他の人の発話を聞く、という状況が多くあります。新試験では、このような状況も出題範囲に反映しました。対話者のいるコミュニケーションでは、発話や応答の適切さを即時に判断する必要があります。そこで、短い発話や状況説明と選択枝のみを聞いて解答する形式とし、即時的な処理ができるかどうかを焦点を当てた問題としました。大問は、「即時応答」と「発話表現」の二つです。

「即時応答」は、相手の発話にどのように応答するのがふさわしいかを即時に判断できるかどうかを問う問題で、全レベルで出題します。短い発話とそれに対する応答（選択枝）は音声で示されます。

「発話表現」は、場面や状況にふさわしい発話を即時に判断できるかどうかを問う問題です。挨拶・依頼・許可求めなどのよく使われる表現を主に扱っており、N3、N4、N5で出題します。場面や状況は、音声による状況説明とイラストで示されます。なお、この問題は他の聴解の問題とは異なり、話し手の発話を選択する形式となっています。実際のコミュニケーションでは、発話が場面や状況に合っているかどうか判断することも必要な力だと考えられますので、新試験では、適切な発話を選択枝から選ぶという問題形式を聴解問題として設けました。

(3) 聴解で扱うテキストの特徴

聴解問題では、各レベルで上述の大問のねらいにふさわしい問題を用意するために、試験問題として作成・録音したテキストを使用しています。現実場面の音声ではないという制約はありますが、その中で最大限現実の聴解に近づけることを目指しています。問題のテキストには「(1) 聴解とは」で述べた話し言葉の特徴をできる限り取り入れ、レベルに応じた発話速度や会話の自然さを保っています。ただし、一部の地域のみで使用される方言など、使用が限定されている言葉は含みません。また、二人以上で話されている会話（ダイアログ）と一人で話している独話（モノログ）の両方を含め、話題や場面には「目標言語使用領域」を反映させています。

参考文献

8. 1 課題遂行のための言語コミュニケーション能力

Bachman, L. F. & Palmer, A. S. (1996) *Language Testing in Practice*, Oxford: Oxford University Press. (大友賢二、ランドルフ・スラッシャー訳 2000 『<実践>言語テスト作成法』大修館書店)

Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*, Oxford: Oxford University Press. (池田央、大友賢二監修、大友賢二、笠島準一、服部千秋、法月健訳 1997 『言語テスト法の基礎』C.S.L. 学習評価研究所)

Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, and Assessment*, Cambridge University Press. (吉島茂、大橋理枝訳 2004 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日書店)

8. 2 言語知識 (文字・語彙)

Laufer, B. (1990) Words you know: How they affect the words you learn. In J. Fisiak (Ed.) *Further Insights into Contrastive Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, 573-593.

Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge: Cambridge University Press.

Read, J. (2000) *Assessing Vocabulary*, Cambridge: Cambridge University Press.

8. 3 言語知識 (文法)

池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 I』国立国語研究所

Bachman, L. F. & Palmer, A. S. (1996) *Language Testing in Practice*, Oxford: Oxford University Press. (大友賢二、ランドルフ・スラッシャー訳 2000 『<実践>言語テスト作成法』大修館書店)

Purpura, J. E. (2004) *Assessing Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.

8. 4 読解

Urquhart, A. H. & Weir, C. J. (1998) *Reading in a second language: Process, product and practice*. London/New York: Longman.

8. 5 聴解

Buck, G. (2001) *Assessing Listening*. Cambridge: Cambridge University Press.

Luoma, S. (2002) *Assessing Speaking*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rost, M. (2002) *Teaching and Researching Listening*. Harlow: Pearson Education Limited.

Shohamy, E. & Inbar, O. (1991) Validation of listening comprehension tests: the effect of text and question type. *Language Testing*, 8: 23-40.

9 問題解答上の留意点

ここでは、「7 新試験の構成と大問のねらい」の中で、「◆ 現行試験では出題されていなかった新しい問題形式のもの」を中心に取り上げて、解答する上での留意点を詳しく説明します。

9. 1 言語知識（文字・語彙）

(1) 漢字読み（N1～N5）

現行試験では一文の中から複数の漢字の読みを問うことが多かったのですが、新試験では一文で一語のみ問います。

例（N1）

彼は今、新薬の研究開発に挑んでいる。

- 1 はげんで 2 のぞんで 3 からんで 4 いどんで

(2) 表記（N1～N5）

現行試験では一文の中から複数の表記を問うことが多かったのですが、新試験では一文で一語のみ問います。

例（N3）

^{こま}困っているときに、先生にたすけていただきました。

- 1 助けて 2 守けて 3 支けて 4 協けて

(3) 語形成（N2のみ）

派生語や複合語の知識を問う問題で、空所補充の形式になっています。現行試験でも出題されていましたが、N2の「言語知識（文字・語彙）」全体での位置づけを明確にし、大問として毎回出題します。

例（N2）

あの映画の最後は（ ）場面として知られている。

- 1 名 2 高 3 良 4 真

(4) 文脈規定 (N1～N5で出題されますが、変更があるのはN5のみです。)

N5の「文脈規定」では、例のように、イラストを利用した問題を出題することがあります。文だけでは正答を選ぶことができません。イラストを見て、正答を選びます。

例 (N5)

ここは () です。 ぺんきょうできません。

1 くらい

2 さむい

3 うるさい

4 あぶない



9. 2 言語知識（文法）

(1) 文の文法2（文の組み立て）（N1～N5）

統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるかを問う問題で、並べ替えの形式をとっています。

ここでは、例題と文を組み立てる際の留意点について説明します。

①例題について

「文の文法2（文の組み立て）」の並べ替え形式の問題では、全レベルにわたって問題冊子に例題を載せています。ここでは、N5の場合で説明します。

もんだい2 ★に ^{はい} 入る もの は どれですか。
 1・2・3・4から ^{ひと} いちばん いい ものを
 一つ ^{ひと} えらんで ください。

これは解答指示文です。

(もんだいれい)

A 「 _____ ★ _____ か。」

B 「^{やまだ}山田さんです。」

1 です 2 は 3 あの ^{ひと}人 4 だれ

これは問題例です。

(こたえかた)

1. ただしい ^{ぶん}文を つくりま す。

A 「 _____ ★ _____ か。」

3 あの ^{ひと}人 2 は 4 だれ 1 です

B 「^{やまだ}山田さんです。」

これは解答のしかたです。
 並べ替えた文です。

2. ★に ^{はい} 入る ばんごうを くら く ぬりま す。

(かいとうようし)

(れい) ① ② ③ ●

これは解答用紙の記
 入のしかたです。

② 文を組み立てる際の留意点

「文の文法2（文の組み立て）」では、空所の途中で句点（「。」）が入ることはありません。

「○」が付いているのが正答で、「×」が付いているのは誤答です。

例（N5）

きのう、_____ ★ _____。

1 じしょを

2 ^{にほんご}日本語の

3 ^い行きました

4 ^か買いに

○ きのう、^{にほんご}日本語の ^{じしょを} ^か買いに ^い行きました。

× きのう、^い行きました。^{にほんご}日本語の ^{じしょを} ^か買いに。

この例（N5）では「きのう、日本語の じしょを 買いに 行きました。」が正答です。語順の可能性としては、「きのう、行きました。日本語の じしょを 買いに。」も考えられます。しかし、後者の語順では、句点（「。」）によって、空所の途中で文が一度切れてしまいます。このように、空所の途中で句点が入るような語順は、「文の文法2（文の組み立て）」では正答としません。

（2）文章の文法（N1～N5）

文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う問題で、文章の空所を補充する形式をとっています。全レベルで出題されます。

例 (N4)

もんだい3 から に 何を 入れますか。

1・2・3・4から いちばん いい ものを 一つ えらんで
ください。

つぎの 文章は アリさんが 友だちの 田中さんに 書いた 手紙です。

田中さん、お元気ですか。わたしは 先週、大学の 近くに
ひっこしを しました。前は アパートから 大学まで 電車と
バスで 1時間半ぐらい かかりました。でも、今の アパート
 大学まで ^{ある}歩いて 10分ぐらいです。、ここに
ひっこす ことに しました。少し せまいですが、新しくて
きれいだし、^{きんじょ}近所に スーパーも あります。^{えき}駅からも ^{ちか}近くて、
^{せいかつ}生活が とても 。それに、アパートの へやの まどから 見える
けしきも いいです。だから、ひっこしを して ^{ほんとう}本当に よかったと
。この ^{てがみ}手紙と いっしょに、わたしの へやの まどから 見た
けしきの ^{しゃしん}写真を 。それでは、また。

2010年2月25日

アリ

- | | | | | |
|--------------------------------|-----------------------------|----------------------------|--------------------------|-------------------------|
| <input type="text" value="5"/> | 1 も | 2 が | 3 や | 4 は |
| <input type="text" value="6"/> | 1 しかし | 2 それで | 3 たとえば | 4 それから |
| <input type="text" value="7"/> | 1 ^{べんり} 便利に になりました | 2 ^{べんり} 便利だったそうです | 3 ^{べんり} 便利でしょうか | 4 ^{べんり} 便利です |
| <input type="text" value="8"/> | 1 ^{おも} 思うようです | 2 ^{おも} 思っています | 3 ^{おも} 思ったようです | 4 ^{おも} 思っていました |
| <input type="text" value="9"/> | 1 ^{おく} 送って みませんか | 2 ^{おく} 送って ください | 3 ^{おく} 送らなさい | 4 ^{おく} 送ります |

この例 (N4) のように、「文章の文法」では、一つの文章の中に五つの空所があります。解答にあたっては、前後の文の内容や、文章全体の流れをよく考える必要があります。

9. 3 読解

(1) 統合理解 (N1、N2)

複数のテキストを読み比べて、情報を比較・統合しながら理解できるかを問う問題です。

例 (N1)

問題 11 次のAとBはそれぞれ別の新聞のコラムである。AとBの両方を読んで、後の問いに対する答えとして、最もよいものを1・2・3・4から一つ選びなさい。

A

国語辞典『大言典』の第四版が発売された。十年前の改訂^(注1)以降の社会や生活の移り変わりを反映した言葉約一百万項目が新たに加えられたという。収録語数は総計二十四万件余りと、同種の辞書の中では最多を誇る。

出版社によると、新たに盛り込まれたのは「逆切れ」など世相を反映した語の他、「イケメン」「ラブラブ」といった若者言葉など。

「逆切れ」については「怒られた人が反対に怒り出してしまうこと」と書かれている。また、「イケメン」は「カッコいい男性」と説明。「ラブラブ」については「互いに愛し合っていて仲がよい様子」と説明されている。

今回採用された新語のうちカタカナ語が実に四割近くを占めた。長年改訂に携わっている担当者の一人は「選定の過程では、私自身もわからない言葉がいくつもあり判断に困った。若者には常識なんだろうけど」と話していた。

(中央経政新聞)

B

全面改訂された『大言典』第四版では、マスメディアやインターネットなどから収集した約十萬語のうち、一時の流行にとどまらず、人々の間に定着したと認められる新語を厳選。「ラブラブ」「イケメン」など約一萬語が新たに増えたそう。

時代の流れに即した新感覚の辞書と言えは響きはいいが、宣伝のための話題作り以上のものがあるだろうか。流行とはしよせん一時のもの。いずれ消えゆくものは自然に忘れ去られるまで放っておけばよい。

それゆえ、「家電^{いえでん}」「自宅の電話番号」「クルビズ(＝夏のビジネス用の服装)」などは、「一時的な流行や狭い範囲だけで使われている」として採用が見送られたのは賢明であろう。

(毎朝日報)

(注1) 改訂:本や辞書を直して新しく出版すること

27 この辞書が多くの新語を取り入れたことについて、Aの筆者とBの筆者はどのような立場をとっているか。

- 1 AもBも、ともに明確にしていない。
- 2 AもBも、ともに批判的である。
- 3 Aは批判的であるが、Bは明確にしていない。
- 4 Aは明確にしていないが、Bは批判的である。

テキストAでは、筆者の立場ははっきり書かれていません。テキストBでは、筆者は第2段落で批判的な立場を取っています。したがって、正答は4となります。

この例のように、AとBという複数のテキストを見比べて、比較・統合して理解することができるかどうかを問う問題が「統合理解」です。

(2) 主張理解 (N1、N2)

社説や評論などの論理的な文章を読んで、テキストが全体として伝えようとしている主張・意見を読み取ることができるかを問う問題です。問題の形式は新しいものではありませんが、N1、N2の読解問題全体の構成の中での位置づけを明確にし、大問として毎回出題します。

(3) 情報検索 (N1～N5)

「情報素材」の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う問題です。

「情報素材」とは、お知らせやパンフレットなど、隅から隅までじっくり読んで理解するのではなく、読む目的に沿って、必要などころだけを探したり拾い読みしたりすることが多いタイプのテキスト全般を指します。

したがって、「情報検索」では、例(N2)のようにまず「問い」があり、その後にテキストがあります。

例(N2)

問題14 下は、「かすみ市」の市立図書館の利用案内である。

後の問いに対する答えとして、最もよいものを1・2・3・4から一つ選びなさい。

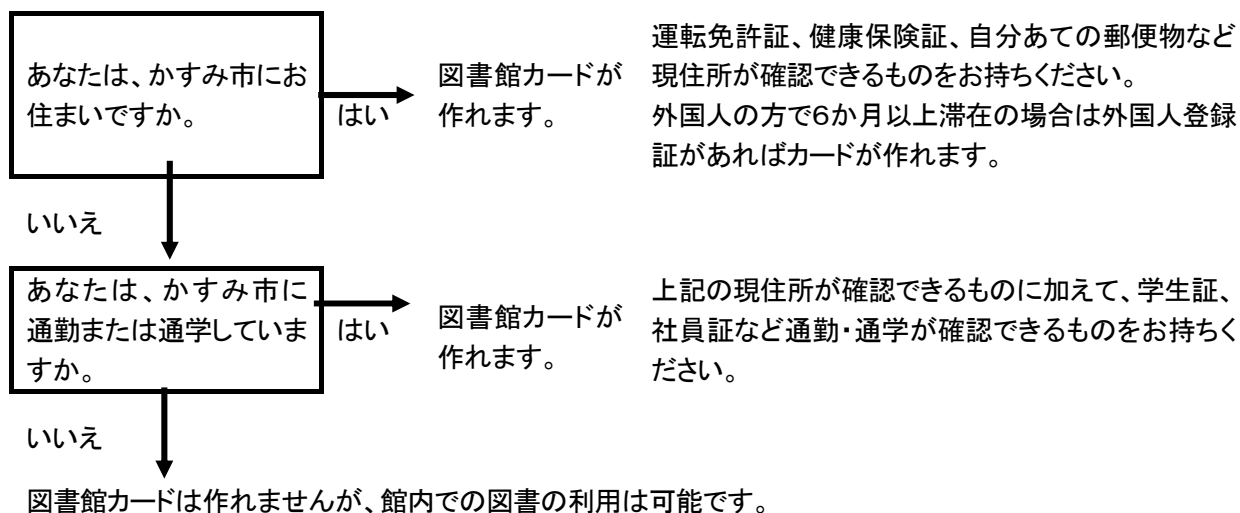
30 かすみ市に住んではいないが市内で働いている人が、図書館カードを作るとき何が必要か。

- 1 現住所が確認できるもの
- 2 通勤・通学が確認できるもの
- 3 現住所と通勤が確認できるもの
- 4 現住所が確認できるものと外国人登録証

かすみ市立図書館利用案内

☆図書館カードの新規作成

※ 図書やCD等の資料を借りるには図書館カードが必要です。



☆図書館カードの更新

図書館カードの有効期限は3年間です。有効期限が過ぎる前に、カードの更新をしてください。

更新に必要なもの：古いカードおよび新規申込時と同様の証明書をお持ちください。

※古いカードで借りたまま返していない貸し出し図書がある場合は更新できません。

☆貸し出し冊数

図書(本・雑誌) 1人5冊まで
CD・カセットテープ・ビデオテープ・DVD 1人3点まで

合計8点まで貸し出しできます。

※ただし、雑誌の最新号は貸し出しできません。

☆貸し出し期間

図書(本・雑誌) 2週間以内
CD・カセットテープ・ビデオテープ・DVD 1週間以内

※貸し出し期間の算定は、貸し出し日の翌日からとなります。

※貸し出し期間は、申し出のあった日から2週間だけ延長することができます。

電話でのお申し出も受け付けます。

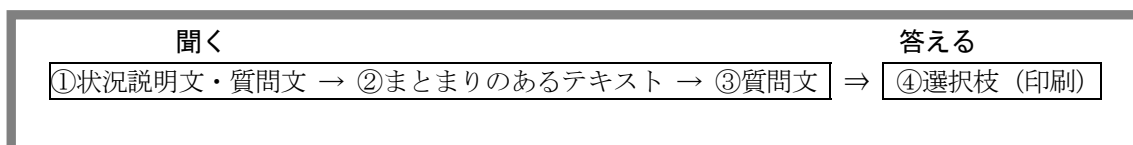
(ただし、期限切れや予約が入っている図書の延長はできません。また、CDやビデオなどの視聴覚資料の延長はできませんのでご了承ください。)

9. 4 聴解

「8. 5 聴解」で説明したように、新試験の「聴解」では、①内容が理解できるかどうかを問う問題と、②即時的な処理ができるかどうかを問う問題の二つになり、現行試験から問題の構成が大きく変わります。そこで、「聴解」では、すべての大問について詳しく解き方を説明します。

(1) 課題理解 (N1～N5)


課題理解の流れは、次のようになっています。




- ① 状況説明文と質問文を聞きます。質問文では「男の人はこれから何をしますか」のような質問がされます。
- ② まとまりのあるテキストが流れます。問題冊子に印刷されたイラストや文字による四つの選択枝を見ながら、聞きます。
- ③ もう一度質問文を聞きます。
- ④ 質問文のあと、数秒間の解答時間があります。この間に、四つの選択枝の中から、もっとも適切な答えを選びます。

➤ 問題例


例 (N1)

 女の人が新しい製品の企画書について男の人と話しています。
女の人はこのあと何をしなければなりませんか。

①状況説明文と質問文を聞きます

 女性：課長、明日の会議の企画書、みていただけましたでしょうか。
男性：うん、わかりやすく出来上がってるね。
女性：あ、ありがとうございます。ただ、実は製品の説明がちょっと弱いかなって気になってるんですが…。
男性：うーん、そうだね。でもまあ、この部分はいいかね。で、えーと、この11ページのグラフ、これ、ずいぶん前のだね。
女性：あ、すみません。
男性：じゃ、そのグラフは替えて…。あ、それから、会議室のパソコンやマイクの準備はできてる？
女性：あ、そちらは大丈夫です。

②まとまりのあるテキストを聞きます

 女の人はこのあと何をしなければなりませんか。

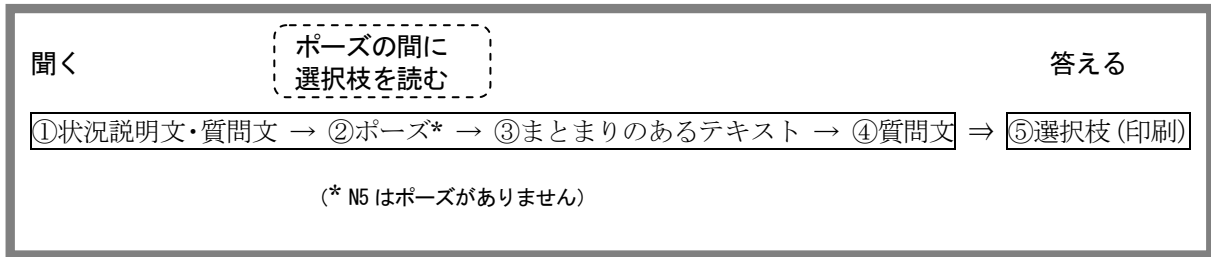
③もう一度質問文を聞きます

1. 企画書を見せる
2. 製品の説明を書き直す
3. データを新しくする
4. パソコンを準備する

④問題冊子に印刷された選択枝から、答えを選びます
(正答3)

(2) ポイント理解 (N1～N5)




ポイント理解の流れは、次のようになっています。



- ① 状況説明文と質問文を聞きます。
- ② N1からN4では、質問文のあとに数秒間のポーズがあります。この間に問題冊子に印刷された文字による四つの選択枝を読み、具体的に何を聞き取らなければならないかを確認します。N5にはポーズがありません。
- ③ まとまりのあるテキストが流れます。選択枝を見ながら聞きます(N5ではイラストもあります)。
- ④ もう一度質問文を聞きます。
- ⑤ 質問文のあと、数秒間の解答時間があります。この間に、問題冊子に印刷された選択枝の中から、もっとも適切な答えを選びます。

➤ 問題例

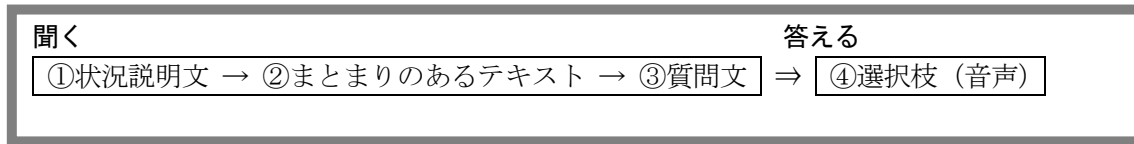
例 (N1)

 <p>大学で男の人と女の人が話しています。 この男の人は先生がどうして怒ったと言っていますか。</p>	<p>①状況説明文と質問文を聞きます</p>
<p><ポーズ></p>	<p>②選択枝を読む時間が与えられます</p>
 <p>男性：あー、先生を怒らせちゃったみたいなんだよねー。 困ったなあ。 女性：え、どうしたの？ 男性：う〜ん。いやそれがね、先生に頼まれた資料、昨日までに渡さなくちゃいけなかったんだけど、いろいろあって渡せなくて…。 女性：えー、それで怒られちゃったの？ 男性：うん、いや、それで怒られたっていうより、おととい、授業の後、飲み会があつてね。で、ついそれを持ってっちゃったんだけど、飲みすぎて、寝ちゃって、忘れてきちゃったんだよね。 女性：え、じゃ、なくしちゃったわけ？ 男性：いや、出てはきたんだけどね、うん。先生が、なんでそんな大事な資料を飲み会なんかを持って行くんだって。 女性：ま、そりゃそうよね。</p>	<p>③まとまりのあるテキストを聞きます</p>
 <p>この男の人は先生がどうして怒ったと言っていますか。</p>	<p>④もう一度質問文を聞きます</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 昨日までに資料を渡さなかったから 2. 飲み会で飲みすぎて寝てしまったから 3. 飲み会に資料を持っていったから 4. 資料をなくしてしまったから 	<p>⑤問題冊子に印刷された選択枝から、答えを選びます (正答3)</p>

(3) 概要理解 (N1～N3)

概要理解の流れは、次のようになっています。

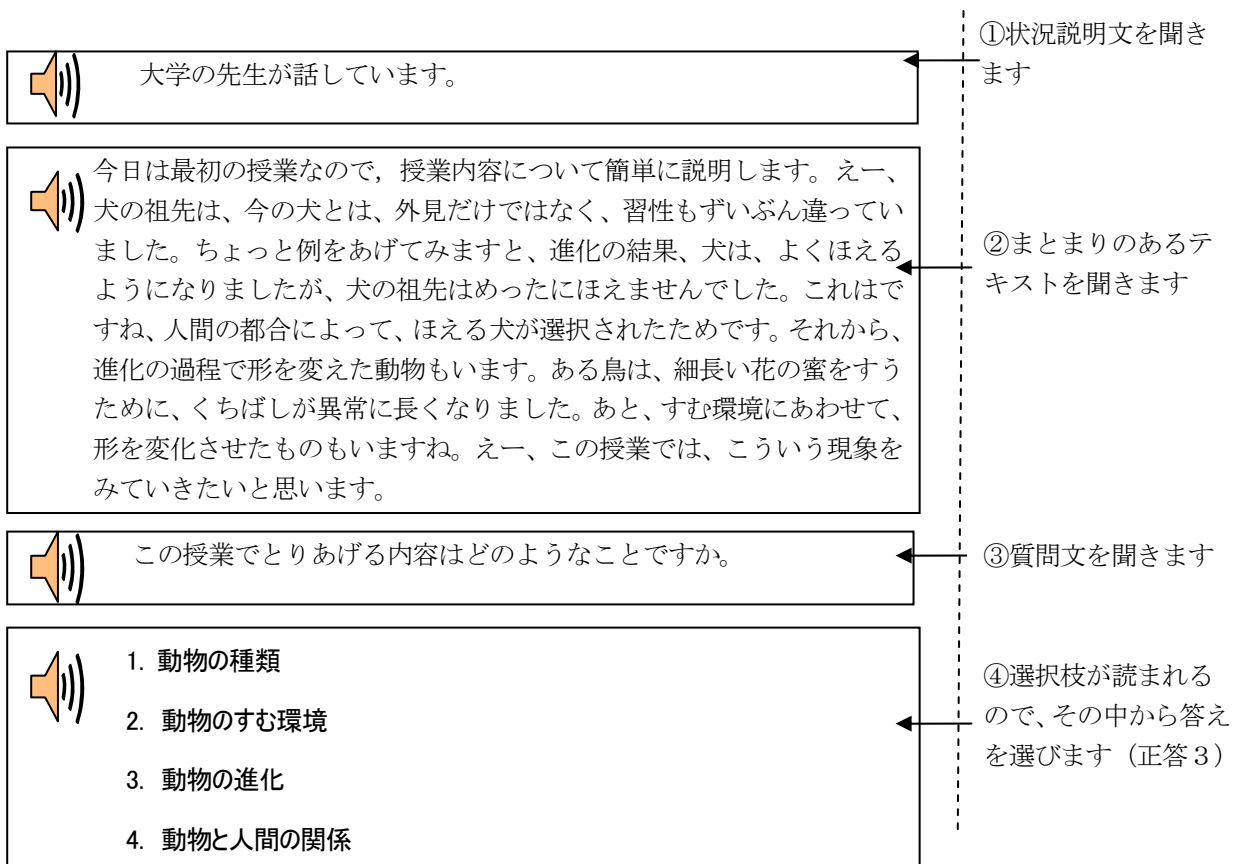
課題理解やポイント理解とは異なり、質問文は最初には流れず、まとまりのあるテキストの後に一度だけ流れます。



- ① 状況説明文を聞きます (質問文は流れません)。
- ② まとまりのあるテキストを聞きます。
- ③ 質問文を聞きます。
- ④ 四つの選択枝が音声で提示されます。もっとも適切な答えを選びます。

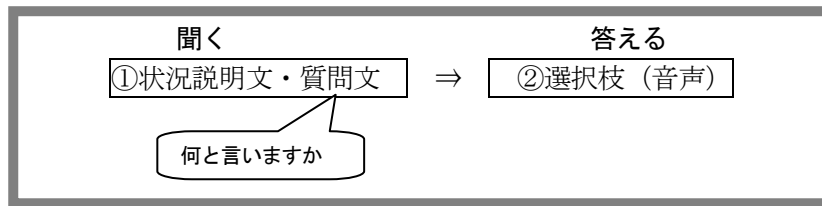
➤ 問題例

例 (N1)



(4) 発話表現 (N3～N5)

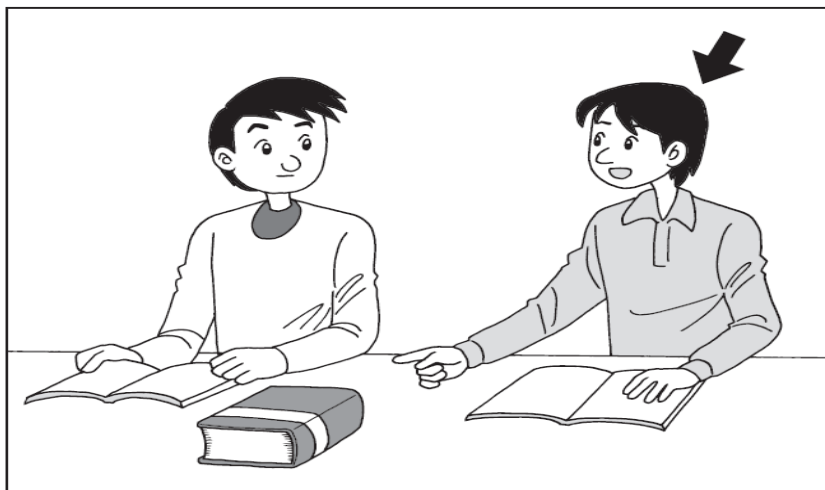
発話表現の流れは、次のようになっています。




- ① 状況説明文と質問文「何と言いますか」が流れます。イラストを見ながら聞きます。
- ② 三つの選択枝が音声で提示されます。イラストの中の、矢印で示されている人物がこの後何と言
うか、最も適切な発話を選びます。


➤ 問題例

例 (N5)



 友達の辞書を使いたいです。何と言いますか？

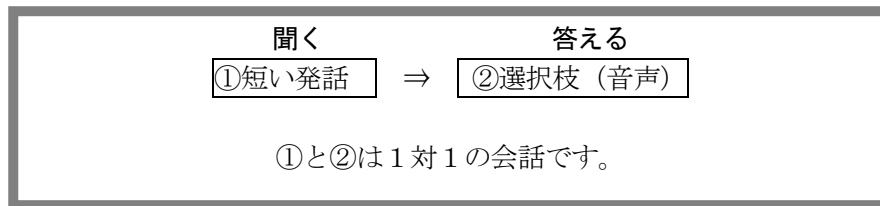
①状況説明文と質問文を聞きます

- 
- 1. この辞書、ありがとうございました。
 - 2. この辞書、貸してください。
 - 3. この辞書、いいですよ。

②選択枝が読まれるので、その中から答えを選びます
(正答2)

(5) 即時応答 (N1～N5)



即時応答の流れは、次のようになっています。



- ① 質問などの短い発話を聞きます。
- ② その発話に対する、三つの返答 (選択枝) が音声で提示されます。最初の人への発話に対して何と答えたらいいか、もっとも適切な返答を選びます。

➤ 問題例

例 (N1)

	あーあ、今日は、お客さんからの苦情が多くて、仕事にならなかったよ。	← ①短い発話を聞きます
	1. いい仕事、できてよかったね。 2. 仕事、なくて大変だったね。 3. お疲れ様、ゆっくり休んで。	← ②その発話に対する返答を聞き、もっとも適切なものを選びます (正答3)

(6) 統合理解 (N1、N2)

統合理解の流れは、次のようになっています。

長いテキストを聞いて、それに続く質問に答えます。質問文は、最初は流れず、長めのテキストのあとに一度だけ流れます。


	聞く		答える
1 番	①状況説明文→②長めのテキスト→③質問	⇒	④選択枝 (音声)
2 番	①状況説明文→②長めのテキスト→③質問	⇒	④選択枝 (印刷)

- ① 状況説明文を聞きます (質問文は流れません)。
- ② 長めのテキストを聞きます。
- ③ 質問文を聞きます。1 番では一つのテキストについて一つの質問が、2 番では一つのテキストについて二つの質問がなされます。
- ④ 1 番では選択枝が音声のみで提示されます。2 番では選択枝が問題冊子に印刷されています。それぞれ、四つの選択枝の中から、もっとも適切な答えを選びます。


注) このほかのタイプの問題も出題されることがあります。

➤ 問題例


1番 例 (N2)

 家族三人が父親のタバコについて話しています。


①状況説明文を聞きます

 女性1：おとうさん、またタバコですか。もうそろそろ禁煙してくださいよ。
男性1：どうして？
女性1：おとうさんには、長生きしてほしいし。
男性1：それなら、大丈夫だよ。60歳をすぎたら、タバコをすっても、すわなくても、寿命はかわらないって調査があったぞ。タバコをやめると太るっていうから、今のほうが長生きできるってわけだ。
男性2：おとうさんは、いいかもしれないけど、おかあさんやぼくは、毎日お父さんのタバコの煙をすわされているわけでしょう？そのほうが、もっと健康に悪いってテレビで言ってたよ。
女性1：そうよ。家族にも被害を与えているんですよ。
男性1：そうか…それは責任重大だね。じゃ、がんばってみるよ。
女性1：そうですよ。おねがいしますよ。

②長めのテキストを聞きます


 お父さんはなぜタバコを吸わないことにしましたか

③質問文を聞きます


-  1. 長生きしたいから
2. 体重が増えたから
3. 60歳になったから
4. 家族の健康に悪いから

④選択枝が読まれるので、その中から答えを選びます
(正答4)

2番 例 (N1)

 お店の人がジュースの説明をしています。

①状況説明文を聞きます

 男性： えー、こちらをご覧ください。当店ではおいしさだけでなく栄養のバランスを考えた健康ジュースをご用意いたしました。黄色、紫、緑、赤の4種類。それぞれ効果が異なりますので、皆さまの体調や目的に合わせてお選びいただけます。まず男性サラリーマンの方に人気なのがこの黄色でして、こちらは疲労回復効果があります。えー次に女性の方にお勧めなのが、この紫で、美容に大変いい要素が豊富に含まれております。緑には、パソコンなどによる目の疲れを取る働きがございます。またちょっと高いんですが、若い男性の方々からは、黄色にさらに美容効果を加えたこの赤が、大変ご好評でございます。

女性： へえ、よさそう。やっぱりきれいになるっていうのは魅力的ね。

男性： でも、仕事で一日中パソコン使ってるんだよね？


女性： そうなのよね。目の疲れってのもつらいのよね。そっちのほうがいいかな。

男性： じゃあ、飲んでみたら？僕は最近体がだるいから…。

女性： 赤ならお肌もきれいになりそうね。ちょっと高めみたいだけど。

男性： いやあ、僕は美容効果の方はいいよ。


②長めのテキストを聞きます

 質問1. この女の人にはどのジュースが最も効果的ですか。

③質問文を聞きます

質問1.
1. きいろ黄色 2. むらさき紫 3. みどり緑 4. あか赤

④問題冊子に印刷された選択枝から、答えを選びます
(正答3)

 質問2. この男の人はどのジュースを飲もうと考えていますか。

③質問文を聞きます

質問2.
1. きいろ黄色 2. むらさき紫 3. みどり緑 4. あか赤

④問題冊子に印刷された選択枝から、答えを選びます
(正答1)

Ⅲ 参考情報

10 申し込みと結果通知

10.1 申し込み

日本で受験する人は日本国際教育支援協会に、海外で受験する人は受験する国・地域の実施機関に、願書を提出して申し込みます。申し込みは、受験を予定している国・地域で行う必要があります。それ以外の国・地域での申し込みはできません。なお、申し込みの方法や願書などは、国・地域によって異なりますので、下の各ホームページを参照してください。

日本で受験する人：日本国際教育支援協会 <http://www.jees.or.jp/jlpt/>

海外で受験する人：国際交流基金 <http://www.jlpt.jp/>

台湾で受験する人：財団法人交流協会 <http://www.koryu.or.jp>

10.2 身体等に障がいがある方の受験

新試験では現行試験と同様に、身体等に障がいのある受験者のために、点字や文字を拡大した問題冊子による試験や、聴解免除などの特別措置を実施します。特別措置については、受験を希望する国・地域の実施機関に問い合わせてください。願書とともに「特別措置申請書」を提出することが必要です。

10.3 試験結果の通知方法

試験の結果は、日本国内での受験者には日本国際教育支援協会から、海外での受験者には国際交流基金から各実施機関を通じて通知します。

結果に関する書類は、次の通りです。

「合否結果通知書」：受験者全員に発行します。

「日本語能力認定書」：合格者に発行します。

「認定結果及び成績に関する証明書」：受験者のうち、所定の手続きを行った希望者に発行します。

1.1 よくある質問

1.1.1 新試験について

Q 1 新試験は年に何回実施されますか。

A 1 7月と12月の2回です。ただし、海外では7月の試験を実施しない国・地域があります。詳しくは、国際交流基金のホームページ <http://www.jlpt.jp/> に掲載します。

Q 2 新試験の日は決まっていますか。

A 2 7月と12月の初旬の日曜日に行います。

Q 3 新試験はどこで受けられますか。

A 3 日本で受験する人は日本国際教育支援協会のホームページ <http://www.jees.or.jp/jlpt/> を見てください。海外で受験する人は、国際交流基金のホームページ <http://www.jlpt.jp/> の「お知らせ」→「海外の実施機関」→「リスト」から試験を実施している都市を調べることができます。また、台湾で受験する人は財団法人交流協会のホームページ <http://www.koryu.or.jp> を見てください。

Q 4 新試験の主催者はどこですか。

A 4 現行試験と同様に国際交流基金と日本国際教育支援協会です。

Q 5 新試験の試験問題の著作権は、誰が所有しますか。

A 5 現行試験と同様に、全ての問題の著作権は、主催者の国際交流基金と日本国際教育支援協会が所有します。

1 1. 2 レベルについて

Q 6 受験するレベルはどのように決めればいいですか。

A 6 本ガイドブックの9ページ表1『新しい「日本語能力試験」 認定の目安』や『新しい「日本語能力試験」問題例集』を参考にしてください。また、現行試験の級も手がかりになります。具体的には下の通りです。

N 1	現行試験の1級よりやや高めのレベルまで測れるようになります。合格ラインは現行試験とほぼ同じです。
N 2	現行試験の2級とほぼ同じレベルです。
N 3	現行試験の2級と3級の間のレベルです。(新設)
N 4	現行試験の3級とほぼ同じレベルです。
N 5	現行試験の4級とほぼ同じレベルです。

Q 7 新しくできるN 3はどのようなレベルですか。

A 7 現行試験の2級と3級の間のレベルで、「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」レベルです。「幅広い場面での日本語」の理解を測るN 1、N 2と、教室内で学ぶ「基本的な日本語」の理解を測るN 4、N 5の、「橋渡し」のレベルと位置づけています。詳しくは8～9ページの「2 認定の目安」を参照してください。

1 1. 3 試験問題について

Q 8 新試験にはどのような問題が出題されますか。

A 8 各レベルの問題の構成とねらいは19～25ページ「7 新試験の構成と大問のねらい」に、具体的な問題の例は『新しい「日本語能力試験」問題例集』に示していますので、参照してください。

Q 9 新試験では、現行試験のように前年に実施した試験の問題集が出版されますか。

A 9 いいえ。前年に実施した試験の問題をすべて掲載した問題集は出版しません。

『新しい「日本語能力試験」問題例集』がありますので、練習問題として活用してください。この『新しい「日本語能力試験」問題例集』は、実際に出題する試験問題と同形式の問題で構成しています。

また、2012年には、2010年と2011年に出題した問題の一部をこの『新しい「日本語能力試験」問題例集』に加え、試験1回分の問題数に相当する形で新たに問題例集として発行します。その後は一定期間ごとに、実際に出題した試験問題を使って問題集を発行していく予定です。

Q10 全ての受験者が同じ試験問題を受けますか。

A10 いいえ。レベルによって試験問題が異なります。

レベルで試験問題を分けるのは、可能な限り正確に、その人の日本語能力を測定するためです。自分に合ったレベルを受験してください。

Q11 試験問題は当日の試験終了後、持ち帰ることができますか。

A11 いいえ。現行試験と同様、持ち帰ることはできません。

Q12 N1とN2の試験科目「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」が、N3、N4、N5で「言語知識（文字・語彙）」と「言語知識（文法）・読解」の二つに分かれているのはなぜですか。

A12 N3、N4、N5では、試験に出題できる語彙や文法の項目が少ないため、N1とN2のように「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」の一つの試験科目にまとめると、いくつかの問題がほかの問題のヒントになることがあるためです。

Q13 新試験では、日本に関する文化的な知識が必要な問題が出題されますか。

A13 日本に関する文化的な知識そのものを問う問題はありません。文化的な内容が問題に含まれる場合もありますが、その知識がなければ解答できないような問題は出題しません。

Q14 新試験には、作文試験や会話試験がありますか。

A14 現段階ではどちらもありません。

1 1. 4 語彙や漢字、文法項目のリストについて

Q15 新試験では、現行試験のような『出題基準』は出版されますか。

A15 いいえ。語彙や漢字、文法項目のリストが掲載された『出題基準』は、新試験では出版しません。

Q16 『出題基準』を出版しないのは、どうしてですか。

A16 日本語学習の最終目標は、語彙や漢字、文法項目の暗記ではなく、それらをコミュニケーションの手段として実際に利用できるようになることだと考えます。新試験では「文字・語彙・文法といった言語知識」とともに、「その言語知識を利用して、コミュニケーション上の課題を遂行する能力」を測ります。したがって、語彙や漢字、文法項目のリストが掲載された『出題基準』の出版は必ずしも適切ではないと判断しました。

Q17 新試験を受験する人を教えるために、『出題基準』に代わる情報はありますか。

A17 各レベルの認定の目安と、問題の構成、『新しい「日本語能力試験」問題例集』の問題例があります。認定の目安は8～9ページ「2 認定の目安」の通りです。問題の構成は19～25ページ「7 新試験の構成と大問のねらい」を参照してください。

また、新試験のレベルは現行試験の級と下のように対応していますので、現行試験の問題や『出題基準』も手がかりになります。

N 1	現行試験の1級よりやや高めのレベルまで測れるようになります。合格ラインは現行試験とほぼ同じです。
N 2	現行試験の2級とほぼ同じレベルです。
N 3	現行試験の2級と3級間のレベルです。(新設)
N 4	現行試験の3級とほぼ同じレベルです。
N 5	現行試験の4級とほぼ同じレベルです。

Q18 新試験の語彙や漢字、文法項目のリストはどのように作られたものですか。

A18 「課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測る」という観点から、日本人の実際の言語使用に基づいて、複数の日本語教育専門家が選びました。書き言葉と話し言葉のバランスに配慮すると同時に、日本語の表現を豊かにする外来語やオノマトペなどを充実させました。

11.5 申し込み、受験の手続きについて

Q19 試験科目の一部だけを申し込むことができますか。

A19 いいえ、できません。

Q20 受験しない試験科目があったら、どうなりますか。

A20 すべての試験科目を受験しなかった場合には、合否判定を行いません。10ページ「3 試験科目」と、11ページからの「4 試験の結果」を参照してください。

Q21 申し込みのとき、試験を受けたい国・地域にいませんが、どうしたらいいですか。

A21 必ず受験する国・地域の実施機関に申し込みをしてください。受験する国・地域によって申し込みの方法が異なりますので、現地の実施機関に問い合わせてください。

Q22 小学生、中学生でも受験ができますか。

A22 はい、できます。年齢制限はありません。

Q23 身体等に障がいがありますが、受験できますか。

A23 はい、できます。受験をする国・地域の実施機関に問い合わせてください。60ページ「10.2 身体等に障がいがある方の受験」も参照してください。

1 1. 6 試験の結果について

Q24 新試験の得点と現行試験の得点を比べることができますか。

A24 いいえ。新試験では試験科目や得点の出し方などが変わりますので、現行試験の得点と比べることはできません。

Q25 試験の結果を受け取るとき、N1、N2、N3では得点区分が「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」に分かれていますが、N4、N5では「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」のひとつだけになっています。どうしてですか。

A25 日本語学習の基礎段階にあるN4、N5では、「言語知識」と「読解」の能力で重なる部分が多いので、「読解」だけの得点を出すよりも、「言語知識」と合わせて得点を出すことが学習段階の特徴に合っていると考えるためです。

Q26 新試験の得点は、どうして「素点」ではなく「尺度得点」で表示するのですか。

A26 「尺度得点」で表示するのは、異なる実施回の得点を共通の尺度上で比較ができるようにするためです。異なる時期に実施される試験では出題される問題が異なるので、どんなに慎重に作成しても、試験の難易度は多少変動してしまいます。「尺度得点」で表示すると、得点が試験の難易度の影響を受けなくなります。詳しい説明は、17ページ「5 得点等化」を参照してください。

Q27 得点区分別得点の最高点が60点または120点という設定になっているのはどうしてですか。

A27 新試験では、項目応答理論に基づく尺度得点表示を行うこととし、検討の結果、このような得点範囲となりました。

現行試験では、各科目の最高点が100点または200点でしたが、例えば、英語の試験のTOEFLでは各セクションの得点が0～30点、総合得点が0～120点の範囲となっているように、最高点が100点または200点ではない外国語の試験は少なくありません。

Q28 N1に合格した人は、日本語で実際にどのようなことができるのですか。

A28 新試験では、各レベルの合格者が日本語でどのような言語行動ができると「考えているか」を調査した結果をまとめた「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)を提供します。このリストを参照することで、合格者本人やまわりの人々が、試験の結果をより具体的に解釈できるようになります。詳しい説明は、18ページ『6 「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)』を参照してください。

Q29 新試験の結果に有効期限はありますか。

A29 有効期限はありませんが、試験の結果を参考にする企業や教育機関が期限を設けている場合があります。

Q30 現行試験に合格していますが、新試験が実施されたら、現行試験の認定は無効になりますか。

A30 いいえ、無効にはなりません。

Q31 新試験の結果は、日本の大学で入学試験の参考資料として使われますか。

A31 日本の大学では、原則として独立行政法人日本学生支援機構が実施する「日本留学試験」<http://www.jasso.go.jp/eju/index.html>の結果を参考にしています。「日本留学試験」を実施していない国・地域からの留学生のために、日本語能力試験の結果を参考にする場合もあります。詳しいことは志望校に直接問い合わせてください。

11.7 証明書等の発行について

Q32 勤務先から日本語能力を公的に証明できる書類の提出を求められました。過去の受験結果について、証明書の発行が受けられますか。

A32 所定の手続きを行えば、希望者には「認定結果および成績に関する証明書」を発行しています。日本で受験した人は日本国際教育支援協会のホームページ<http://www.jees.or.jp/jlpt/>を見てください。海外で受験した人は、国際交流基金のホームページ<http://www.jlpt.jp/>、台湾で受験した人は財団法人交流協会のホームページ<http://www.koryu.or.jp>を見て下さい。60ページ「10.3 試験結果の通知方法」も参照してください。

11.8 そのほか

Q33 新試験のレベルの呼び方「N」はどのような意味ですか。

A33 「N」は「Ni h o n g o（日本語）」、「Ne w（新しい）」を表します。

Q34 今後、新試験の情報はどこでわかりますか。

A34 日本語能力試験のホームページで随時更新を行いますので、<http://www.jlpt.jp/>に掲載される内容を参照してください。

1 2 新試験と現行試験の比較

表 1 3 は、新試験の主な内容を現行試験と対照してまとめたものです。

表 1 3 新試験と現行試験対照表

	現行試験 (1984 年～2009 年)	新試験 (2010 年～)	ガイドブック 参照ページ
実施回数	1 年に 1 回 ¹⁰	1 年に 2 回 ¹¹	—
対象者	<変更なし> 原則として日本語を母語としない幅広い層の人を対象とする。		5
級、レベル	1 級～4 級の 4 段階	N 1～N 5 の 5 段階 ¹²	5
級、レベルの設定	文法、漢字、語彙の程度、学習時間をもとに認定基準を設定。	「読む」「聞く」という言語行動で表した認定の目安を設定 ¹³ 。	5
試験科目	全級を通じて「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の 3 科目。	N 1 と N 2 では「言語知識 (文字・語彙・文法)・読解」「聴解」の順番に 2 科目。 N 3、N 4、N 5 では「言語知識 (文字・語彙)」「言語知識 (文法)・読解」「聴解」の 3 科目。	9
試験時間 ¹⁴	<合計> 1 級—180 分 2 級—145 分 3 級—140 分 4 級—100 分	<合計> N 1—170 分 N 2—155 分 N 3—140 分 N 4—125 分 N 5—105 分	1 0 7 3

10 2009 年は、一部の国・地域で 1 級と 2 級を年 2 回実施します。

11 海外では 7 月の試験を実施しない国・地域があります。

12 2010 年 7 月は N 1～N 3 のみの実施となります。

13 9 ページ表 1 『新しい「日本語能力試験」 認定の目安』を参照してください。

14 試験科目別の時間は、7 2 ページ表 1 4 「レベル・試験科目・試験時間対照表」を参照してください。

	現行試験 (1984年～2009年)	新試験 (2010年～)	ガイドブック 参照ページ
『出題基準』	出題の目安として語彙や漢字、文法項目のリストなどを掲載した『出題基準』を出版。	『出題基準』は出版しないが、試験の構成と大問のねらい、試験問題の例などを提供。	19～25
試験問題	前年度の試験問題を、翌年4月に出版 ¹⁵ 。	実際に出題した試験問題の中から試験1回分の問題数に相当する問題例集を一定期間ごとに発行。	『新しい「日本語能力試験」問題例集』
試験分析の結果	『日本語能力試験 分析評価に関する報告書』を発行 ¹⁶ 。	内容は未定だが発行の予定。	—
受験特別措置 (身体等に障がいがある受験者向け)	<p><変更なし></p> <p>「特別措置申請書」を願書とともに提出し申し込みを行う。点字や文字を拡大した問題冊子による試験や、聴解免除などの特別措置を実施。</p>		60
Can-do リスト	なし	あり。成績解釈のために各レベルの合格者ができると考えている具体的な言語行動例のリスト「日本語能力試験 Can-do リスト」(仮称)を提供。	6 18

¹⁵ 1989年の試験問題から発行されました。

¹⁶ 1990年の試験結果から発行されました。

	現行試験 (1984年～2009年)	新試験 (2010年～)	ガイドブック 参照ページ
試験の形式	<変更なし> マークシート方式による多枝選択型客観テスト。 級・レベル別に問題が異なる。		7
合否判定基準	1級 280点/400点 (70%) 2級～4級 240点/400点 (60%) 総合得点の得点率で判定。	総合得点と得点区分別得点の二つで判定。得点区分別得点の基準点(少なくともこれ以上が必要という得点)を設定。詳細は2010年に決定。	12
得点等化	なし ¹⁷	あり	17
点数表示	素点	尺度得点	11
試験結果の通知方法	合否結果通知書 日本語能力認定書 認定結果および成績に関する証明書	合否結果通知書 日本語能力認定書 認定結果および成績に関する証明書 *記載内容は改定に基づき変更の予定。	13 60

¹⁷ 合格ライン決定に際しては、実際の得点分析をふまえた難易度分析などの統計処理を実施しています。

表 14 レベル・試験科目・試験時間対照表

<新試験>

レベル	試験科目 (試験時間)			試験時間 合計
N 1	言語知識 (文字・語彙・文法)・読解 (110分)		聴解 (60分)	170分
N 2	言語知識 (文字・語彙・文法)・読解 (105分)		聴解 (50分)	155分
N 3	言語知識 (文字・語彙) (30分)	言語知識 (文法)・読解 (70分)	聴解 (40分)	140分
N 4	言語知識 (文字・語彙) (30分)	言語知識 (文法)・読解 (60分)	聴解 (35分)	125分
N 5	言語知識 (文字・語彙) (25分)	言語知識 (文法)・読解 (50分)	聴解 (30分)	105分

*試験時間は変更される場合があります。

<現行試験>

レベル	試験科目 (試験時間)			試験時間 合計
1 級	文字・語彙 (45分)	聴解 (45分)	読解・文法 (90分)	180分
2 級	文字・語彙 (35分)	聴解 (40分)	読解・文法 (70分)	145分
3 級	文字・語彙 (35分)	聴解 (35分)	読解・文法 (70分)	140分
4 級	文字・語彙 (25分)	聴解 (25分)	読解・文法 (50分)	100分

- * 新試験のレベルと現行試験の級の対応は、5 ページ「1. 2 改定のポイント (2) レベルを 4 段階から 5 段階に増やします」の通りです。
- * 各試験科目の間には休憩時間があります。
- * 「聴解」は、試験問題の録音の長さによって試験時間が多少変わります。

*このガイドブックのほかに、『新しい「日本語能力試験」ガイドブック 概要版』と『新しい「日本語能力試験」問題例集』があります。<http://www.jlpt.jp/>からダウンロードできますので、あわせてご利用ください。

*このガイドブックに対するご意見やご質問は、jlptinfo@jpf.go.jp にご連絡ください。

『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』の著作権は、独立行政法人国際交流基金と財団法人日本国際教育支援協会が所有しています。